青いポスト

作　広田淳一

執筆期間:2017.08.15-

【登場人物／出演】

ユキ…　双子の姉。
ハンナ…　双子の妹。
ヤヨイ…　双子の母（グミ）の姉。学者。ライター。
ミーア…　グミのパートナー（ヨーコ）の妹、つまりヤヨイの義妹、双子の叔母にして育ての母。
エリカ…　かつての双子の同級生。悪人選挙管理委員会のメンバー。二年目。
リオ…　その姉。双子と文通していたことがある。

苅谷…　委員会のメンバー。三年目。匿名作家。
スー…　委員会のメンバー。二年目。
サリ…　委員会のメンバー。一年目。

ロア…　町長の娘。悪人選挙管理委員会・委員長。アンのパートナー。
アン…　郵便屋さん。現場主義の管理職。ロアのパートナー。バツイチ。
パム…　郵便屋さん。新人。

【前提】

◎前提／装置

いくつかの椅子。

◎表記について

・　――間を取らない読点。

★　――前の台詞の語尾に重ねて言う。いわゆる食い気味。

／　――間髪入れずに台詞の調子・方向性を切り替える。

＝　――語尾に「＝」が付き、続く行の語頭に「＝」が付く場合、間髪入れずに次の台詞が始まる。行をまたいで語頭に「＝」が付く場合、それらは一人の人物の連続した発話である。

「　――近くにある同数のこの記号と同時のタイミングで始まり、重なったまま発話される。

▲　――そでにはけながら言う。

▽　――言いながら登場する。

☆　――同じ数字の☆印を、同時に言う。

※　――演出家のメモ。

ト書きの「間」と「一拍」は、「一拍」の方が短い。

（このような）括弧内の文字は発話されない。

このような傍点付きの台詞は強調の意味。強調して発話するとは限らない。

【0】この町

◎【情景】　この町

舞台上何もない。
一人の女が舞台上に登場する。
※客入れ挨拶を「ヤヨイ」を演じる俳優がして、そのまま本編になだれ込むのも一案。
以下の台詞の途中から、複数の俳優たちが舞台上を通り過ぎていく。

ヤヨイ　（観客に）ここに、ひとつの町があります。

間。

ヤヨイ　どこにでもある普通の町です。みなさんが住んでいるその町と、――とてもよく似た所です。――でもひとつ、大きく違っている点があります。この町では毎年、一年の終わりに十八歳以上の全員が投票をして、町で「いちばん悪いやつ」を決めるんです。「いちばん悪いやつ」に選ばれてしまった人は投票のその翌日、――ここでは悪人選挙と呼んでいますがその翌日、管理局によって消されてしまいます。――消された人がそのあと、どうなってしまうのか？　消される、とはそもそも何を意味しているのか？　――わかりません。ただ、その人は居なくなります。

間。

▼音響　曲in　「この町」のテーマ。

ヤヨイ　町民たちは消された人のことを話題にはしません。投票日から七日の間だけ設けられた「嘆きの一週間」の期間が終わったら、たとえそれが自分の親であれ、子であれ、恋人であれ、親友であれ、――誰も話題にはしません。消された人のことを話題にするのはとても悪いことだとされているからです。

舞台上、別の場所で、

アン　もう決めた？
パム　まだですー。わかんなくないですか、今年？
アン　気が重いよね。わっかんないし、誰が悪いかなんて。
ロア　いやいやいや、こんな相談してる時点で不正だからね、
パム　え、そうなんですか？
ロア　当たり前でしょ。投票は誰にも相談せず、ひとりで決める！

アン　いいじゃん、家族なんだからさあ。
ロア　それとこれとは話が別。それにパムちゃんは同僚ってだけでしょ。
アン　うわ、冷た。
ロア　事実じゃん。（パムに）別に悪い意味じゃないよ？
パム　え、でも、ひとりで決めるの無理じゃないですか？
ロア　そう？　（あたしは）相談して決める方が無理だけど、
アン　じゃあさ・じゃあさ、とりあえず知合いの名前書くのは無しにしない？　知らない人書こう。
パム　知らない人。
アン　いいですねそれ！
パム　名前わかってる町民を書き出してさ、適当にクジ作って決めたらいいじゃん。
ロア　クジ、――ですか？
アン　もはや選んでないじゃん、なんも。
パム　や、選ぶからしんどいわけでしょ？　クジなら、ね？　罪悪感もないし。
アン　（言いづらそうに）でも、投票はちゃんとやらないと、
パム　そうだけど！　でも、選べなくない？
アン　じゃあ、誰か嫌いな人の名前を書いとく、とか？
ロア　えー？　嫌いな人なんて別にいないしなあ、
パム　うん、あのね、まず、嫌いな人と悪い人はぜんぜん違うから。
アン　ああ、そっか。そう、です、よね。
ロア　え、ごめん、――どう違うの？
アン　あんたさあ、もういい大人なんだから／やってきたでしょ今まで？
パム　なに、どう違うの？　ぜんぜん嫌いな人に投票してきたんだけど。
ロア　（考えながら）嫌いな人、悪い人。
パム　だから政治家とか？　好き嫌い、とかじゃなくて悪そうな人いるでしょ？
アン　あー、そういう／そういうことですか。
ロア　政治家の娘がよくそれを言うね、
　　いや、だからこそ、ね。

三人、退場。

ヤヨイ　悪人選挙は予備投票と、本選挙との二段階になっています。つまり町民は年に二回、この町でいちばん悪いやつは誰か？　という問いに向き合うことになるわけです。

一拍。

ヤヨイ　予備投票の結果はランキング形式で広く公表され、町民たちはその結果を踏まえて本選挙に臨みます。そして、本当に消されるべき「いちばん悪いやつ」を選ぶんです。

一拍

ヤヨイ　毎年、暮れも押し迫ってくると町の中心に「いちばん悪いやつ」を決めるための投票箱が置かれます。それが、「青いポスト」です。

▼音響　曲in　乗り換え。「行き交う人々のテーマ」

行き交う人々。

【1】閉店のあと　ヤヨイの家

◎閉店のあと

ヤヨイの家。
ユキ、ダルそうに座っている。
そこへハンナが怒りに満ちた様子で入ってくる。

ハンナ　（ユキに）ねえ。――ちょっと、ユキ。ねえ！

ユキ、なるべく首を振らず、目だけでハンナをチラと見る。

ハンナ　え、もしかしてさあ、――全部喰った？　――チョコ。

ユキ、ハンナからすごくゆっくり目を逸らす。

ハンナ　――チョコ！　全部喰ったのかって聞いてんだよ！

ユキはそれに答えず、

ユキ　あーあ、ヒマだなー。
ハンナ　★ヒマだなあ、じゃねんだよ。答えろよ。
ユキ　なんなんだよ、うっせえな。
ハンナ　え、ウソでしょ。あんた全部喰ったの？　信じらんな／ええ？　相当な数あったよねだって？
ユキ　大した数じゃなかったけど、
ハンナ　え・え・え、待って待って、自供、自供した、じゃ、じゃあ、喰ったんだ？　［喰ったは喰ったんだ？
ユキ　［ちょっ・ちょっとハンナさん、――やめてくれるそういう、「喰った」とか下品なんですけどホント。
ハンナ　はあ？　下品とかいうんなら人の分まで喰ってるやつのがよっぽど下品だろうがよ。
ユキ　（ゆっくり強調して）「食べた」、「食べた」――ね？　なんだったら召し上がってるから私の場合。
ハンナ　あんな沢山あったのに一晩で喰ったわけ？　［喰いすぎにもほどがあんだろ。
ユキ　ああー、正解だった、正解だったー。こんな下品な人に食べられたんじゃ、あの上品なチョコがもったいなかったよー。
ハンナ　なんなのホント。
ユキ　まあ、ちょっとね、昨夜は糖分が必要になったわけ。考え事があったから。

ハンナ　なんもねえだろ、考えることなんて。
ユキ　――どうしてこういう下品な方が私の妹なのかしら。
ハンナ　おいデブ、姉ちゃん気取りするんだったら妹の分ぐらい残しておけよ。
ユキ　デブじゃねえし！　気の利いた悪口も出てこなくなった？　あんたにも少し糖分残しといてあげたら良かったね＝
ハンナ　おい、おい、おい、
ユキ　＝やあ、無駄か。無理か。糖分があっても。ね。お肉にしかなんないか。
ハンナ　そろそろ黙っとけよ、この無職。
ユキ　ああ？　おめえこそ黙っとけよ、ゴリゴリの肉体労働者のクセしやがって。
ハンナ　何が悪いんだよ、肉体労働の。
ユキ　品だよ、品がなくなるんだよ、［これこのようにね。
ハンナ　［品のことなんか犯罪者に言われたくねえよ。犯罪者、無職。
ユキ　なんだと、好きで無職やってんじゃねえんだよこっちは、
ハンナ　無職がお似合いだよ、てめえのデブ面には！
ミーア　ちょいちょいちょいちょい、

途中からミーアが入ってきており、

ミーア　やめなさいもう、みっともない。
ハンナ　だってこいつがさあ、
ミーア　（ハンナに）ウチじゃないんだから。ね？　仮にも人様ん家にお邪魔してんだから静かにしときな。
ハンナ　だってこいつ、全部食べたんだよ昨日のあの、ばあちゃんにもらったチョコ。
ミーア　（驚いて）あ、――ええ？
ハンナ　ありえなくない？
ミーア　昨日のってあの、――でっかい、袋でもらったやつ？
ハンナ　そうだよ。あれをこのデブが一晩で全部喰って。
ミーア　（ユキに）ホントなの？
ユキ　――いただきましたけどなにか？
ハンナ　［ホラァ！
ミーア　［ええー、――いや、ふたりに、っていってくれたじゃない。
ユキ　いや、――メインは私でしょ。
ハンナ　［はあ？
ミーア　［ええ？
ユキ　ばあちゃんだってメインは私にくれたわけでしょ？　そりゃそうでしょ、今、このタイミングなんだから。そういうニュアンスが醸し出されてたじゃん？
ハンナ　醸し出されてねえよ。なにばあちゃんの気持ち勝手に忖度して、
ユキ　じゃあ、あとで聞いてみようか？

ハンナ　（ミーアに）どう思う？
ミーア　（ユキに）まあ、うーん。――一応、ばあちゃんは「二人にね」って言ってたんじゃなかった？
ハンナ　でしょ？
ヤヨイ　「ばあちゃん」じゃないけどね、まず。

ヤヨイ、ここまでに登場している。

ミーア　ああ、すみませんホント、起こしちゃいました？　騒がしくしちゃってもう、
ヤヨイ　うんうんうん。起きてた起きてた。騒がしいのはいいの別に＝
ミーア　ああ。
ヤヨイ　＝そんなに寝坊してるわけじゃないしね、いつも、
ミーア　――そうでしたか＝
ヤヨイ　＝それよりもさ、んん？　なんだ。未だにさ、（自分を示しつつ）ばあちゃん、ということになっているわけ？　ミーアさんの家では？
ミーア　いや、そういうわけじゃないですよ、決して。
ヤヨイ　じゃ、どうして［この子たちは、
ミーア　［（誤魔化そうとして）いやいやいや！　もうだって、ねえ？　叔母さん。叔母さんなわけですからね、血縁関係的にはだって、ばあちゃん？　ばあちゃんてことは無いですよ全然、
ヤヨイ　ねえ？　さんざん指摘してきたよ、そのことは。
ミーア　はい。それはもう、だから、――はい。

一拍。

ユキ　（小声で）自分だって言ってんじゃん、
ミーア　（牽制して）ん？　ん？　ん？
ハンナ　（ヤヨイに）なんかさー、ややこしいじゃん。
ヤヨイ　はい？
ハンナ　まあ、ホラ、叔母さんていっちゃうと、ミーアも叔母さんなわけだから、血縁的には。
ミーア　そうねそうね。
ユキ　（ミーアを示しつつ）母親の、妹と、（ヤヨイを示しつつ）母親の、パートナーのお姉さんなわけでしょ。
ハンナ　（頷きつつ）ややこしい。
ユキ　てことはさ、――どっちかはばあちゃんでしょ＝
ヤヨイ　＝違くない？　え、違くないそれは？

ハンナ　（ヤヨイを丸め込もうとして）もう、もう、もう、それは！　それは、ね。一応、
（ヤヨイの方が）年も上なわけだし、
ユキ　そうそうそう。
ヤヨイ　や、上だけども。――いいじゃん、両方とも叔母さんで。それが正しいんだし。
ユキ　やあ、でもそれは――
ハンナ　わかんない・わかんない。
ユキ　愛着湧いてるしね、ばあちゃん。ばあちゃん、ていうことで、
ハンナ　だよねー。それになんだったら、――え？　「おばさん」より「ばあちゃん」のが、
かわいい感じ？　むしろ逆に？　「ばあちゃん」のが若いまであるよね？
ユキ　ある！　若い、逆に＝
ハンナ　＝逆に逆に＝
ヤヨイ　＝無いけどな。逆じゃねえし、まったく。っていうか、ぜんぜん直す気ないじゃん、
あんたら。
ミーア　すみません、いつも言ってるんですけど。
ヤヨイ　本当かなー。
ミーア　言ってます言ってます。ばあちゃん家では「ばあちゃん」使っちゃダメよって、
ヤヨイ　★（大きく）ばあちゃん家！　――もう、ばあちゃん家になってんじゃん、ここが。
やめてそういう、ばあちゃん家にしないで、人の家を。
ミーア　や、まあ、それはこの子らと揃えないと？　ちょっとややこしいんで。
ユキ・ハンナ　うんうんうん。
ヤヨイ　もうもうもう、じゃあ、いいわ。――い、いいよ、もう、それで。
ユキ・ハンナ　あざーす。
ヤヨイ　――（愚痴って）もともとはチョコがどうとか言ってたのに、なんだこの展開。
ハンナ　あ、それだよ！　え、ねえ、あれってふたりにくれたんだよね？　でしょ？
ヤヨイ　――そうだよ。
ハンナ　ホラ！　それをこいつが「あたしがメインでもらった」とか勝手に人のニュアンスを
醸し出させてさ、
ヤヨイ　でも、確かにね。今はホラ、ユキは大変な時だから。
ハンナ　［はあ？
ユキ　［ホラ！　来たこれ。
ヤヨイ　あんたもお姉ちゃん支えてあげないと、
ハンナ　えー、なんで？
ヤヨイ　ガックリ来てんだから。お店潰されて、謹慎処分とか喰らっちゃってさ。
ユキ　ホント、謹慎はマジクソだった。
ハンナ　え、ガックリ来てるとか言うんだったらミーアのが全然だよねえ？
ミーア　あ、あたし？
ハンナ　だってそうじゃない？　せっかく自分の店引き継いでやったっていうのに、このデブ
チョコ女がヘンな名前に店・改名して？　そんで無茶苦茶やって潰してさあ、

ヤヨイ　デブチョコ女ってことないだろ。そういうこと言うから損するんだよハンナはいつも。
ハンナ　でもさー、
ヤヨイ　痩せてるし、十分。
ハンナ　チョコは全部喰ったけど、
ヤヨイ　チョコはまあ、――そうだけど、
ハンナ　じゃあ、ガリチョコ。ガリチョコくん。ガリチョコ君だ。
ヤヨイ　ガリとかじゃなくて、スリム？　そう、スリム、チョコ、姉さん。うん。――言ってごらん。
ハンナ　はい？
ヤヨイ　さあ。

一拍。

ハンナ　（ユキに）スリム・チョコ・姉さん。
ユキ　――（ミーアに）なんの話これ？？
ミーア　や、考えていかないとね、って。今後のことを。
ヤヨイ　［そうそうそう。
ユキ　［えー？　面倒くさー。
ミーア　しょうがないだろ。もう店は無いんだから、別のこと考えないと。
ユキ　やっぱ再開って無理かなあ？
ミーア　いや、再開はさすがに、
ユキ　また改名してさ、ギャザー改め、ドレープ、みたいな？
ハンナ　無理に決まってんだろ。ちっとは反省しろよ。
ミーア　あんだけの問題になっちゃうと、まあ――。
ユキ　えー。だってめっちゃ繁盛してたじゃん？
ミーア　それが良くなかったんじゃないの、だから。
ユキ　なんでよ？　みんながいいと思ったから繁盛したんでしょ？　簡単なことじゃないよ？
ミーア　わかるよ、わかるけど、――しょうがないでしょ。ルールなんだから、町の。

納得いかない様子のユキ。

ユキ　ホントクソだわ、この町。

ハンナ、傍らにおいてある手紙を手にとって、

ハンナ　あんたもう読んだの、これ？
ユキ　ん？　ああ、まだ。

ハンナ　読んどいてっていったじゃん。
ユキ　ごめんごめん。え、なんて言ってんのリオさん？
ハンナ　別に。お変わりないですか？　みたいな。（手紙を示し）じゃ、いいのね、もう？
ユキ　うん。いいかな。お変わりないし。

ハンナ、懐に手紙をしまう。※あるいは手にしているままでも良い。

ヤヨイ　（ミーアに）そういや、まだ来ないの？　郵便屋さん。
ミーア　ああ、そう、ですね。
ハンナ　順番で回ってんじゃないの？
ヤヨイ　ふーん。そう。
ハンナ　すぐ来んじゃない？

間。

ヤヨイ　なんにせよ予備投票の結果次第か――。
ミーア　そうそう。なんにせよ。
ヤヨイ　（ユキに）なかなか、ね？　選挙が終わらないと、先のことは難しいか？
ユキ　別に。選挙なんか関係ないけど。
ハンナ　ハハ。強がってんの？
ユキ　や、普通に！　選挙どうこうより店・潰された方が全然納得いってないから。そっちで今ツッカエてるからさ、気持ちが。
ハンナ　今後もなにも無いもんね。選挙で選ばれて消されちゃったらさ。
ミーア　（咎めるように）ハンナ。
ヤヨイ　あんまり意地悪なこと言わないの。
ハンナ　はいはい。みんなでユキのことを労りましょうってね。

と、呼び鈴が鳴る。
※チャイムのようなものではなく、鐘、鈴など、そういう音がいい。
ハンナ、部屋の中の少し離れた場所へ移動する。

ヤヨイ　あ、はいはーい。

ヤヨイは玄関の方へ向かい、ミーアは少し離れる。

◎意外な結果

郵便局の配達人（パム）、登場。

ヤヨイ　どうもご苦労さま。
パム　いえいえ。それじゃこちらにサインだけ頂けます？
ヤヨイ　はいはい。

ヤヨイ、サインを書く。

パム　確かに。ありがとうございます。
ヤヨイ　はーい、どうもー。

パム、帰らない。何か言いたげな様子。

ヤヨイ　――ん？　どうかした？
パム　ああ、いや。何も。――んー、いや、――何でも無いです。失礼しまーす。

ヤヨイ、受け取った郵便物の封を開け、中の書類を開いて見る。
間。

ミーア　それであの――、順位は――？
ヤヨイ　いや、――なんか。んー、自分で見なよ。

ヤヨイ、ミーアに書類を渡そうとする、が、

ミーア　いやいやいや！　あたし・あたしは（見られないよそんなの）

ユキが代わりにそれを受け取り、中を見る、
間。

ハンナ　フフ。なに？　ぶっちぎりのトップでも取った？
ユキ　や、まあ、ぶっちぎりではないけど、
ハンナ　ありゃー。ご愁傷様。
ユキ　や、あんたがね。
ハンナ　ん？　え？
ミーア　（ヤヨイに）なに、なんて（書いてありました）？　どういう、え？　ユキは――？
ヤヨイ　んー。ユキは二位。
ミーア　二位？　二位って、え？　二位？　一位じゃなくて？
ヤヨイ　そうそうそう、そうなんだけど、
ミーア　やったじゃない。やった！　ええ。（ユキに）良かったじゃない。良かったねえ！

ユキ　いやいや、まあまあ、
ミーア　うん？　なになになに？
ユキ　や、なんかだから――。

ユキ、ヤヨイを見て、どちらがミーア、ハンナに伝えるか目で駆け引きする。

ミーア　なに、だから？
ヤヨイ　――ハンナがトップ。
ハンナ　はあ？　なんで？
ヤヨイ　いや、僅差ではあるんだけどね、ギリギリ、んー、暫定トップ、みたいな？
ミーア　ハンナ？　ハンナがトップ？　どうして？
ヤヨイ　いや、あたしに言われても、
ミーア　え、なんで？　ええ？　なんでそういう／どういうこと？
ヤヨイ　や、知らないけど。

間。
ハンナ、立ち上がり、部屋の出口に向かう。

ハンナ　ちっと出てくるわ。
ミーア　（不安げに）え、どこ行くの？
ハンナ　別に。適当にお茶でも。
ヤヨイ　（どこからかマフラー的な、ケープ的なものを持ってきており）寒いからこれ着けて。
ハンナ　いいよいいよ、
ヤヨイ　いいからいいから。着けていきなって。

ハンナ、それを身に着けて。

ハンナ　――どうせなら圧勝で取りたかったよね、一位。
ミーア　バカなことといってんじゃないよ。寒くなる前に帰っといで。
ハンナ　はーい。

ハンナ、退場。
間。
ヤヨイ　お茶でも飲む？
間。

ヤヨイ　飲まないか。そういうんじゃないか。
ユキ　ご飯作ってよ。なんか、――こってりしたやつ。
ヤヨイ　この状況で？
ユキ　（ミーアに）いいからさ。ご飯にしようよ。
ミーア　――いらない。
ユキ　いらなくないから。うん。みんなでご飯食べて。そんでなんか、作戦会議しよう。――ね？

間。

ヤヨイ　まあ、作るだけ作っちゃうか。いずれいつかは、食べるんだしね。
ユキ　そうそう。いずれいつかは、食べるんだから。

ヤヨイ、ユキ、退場。
少し遅れてミーアも退場。

◎【手紙】　ハンナからリオへ

ハンナ、登場。
抽象的な場。手紙を書いているシーン。

ハンナ　お手紙、昨日、受け取りました。わざわざご連絡、ありがとうございます。リオさんにはいつもご心配おかけしてすみません。ですが私は、――私たちは、大丈夫です。

一拍。

ハンナ　たしかに予備投票の結果は思ってもみないものでした。あれ？　今年消されるのはユキだったはずじゃないのかなあ、と、驚きもしました。リオさんだってユキを心配してお手紙くださったっていうのに、まさか、ね。あたしが「いちばん」を取るだなんて目から鱗、――じゃないか、青天の霹靂って感じです。それでも、――いつかはこんな日が来ると、わかっていたような気もします。

一拍。

ハンナ　特に抗議をするつもりはありません。それで結果が変わるものでもないでしょうし、そんなことより、――何年かぶりにリオさんからお手紙頂戴して、お招きまでいただいて、か

えってありがたいぐらいです。でも、――せっかくのお誘いですが、お伺いすることはできません。ありがとうございました。

一拍。

ハンナ　ユキとふたり、残りの何日かを今まで通り、普通に過ごそうと思います。リオさん、――もうお会いすることも無いかと思いますが、どうぞお元気で。久しぶりにお便りいただけて、本当にうれしかったです。

場面転換。

【2】選挙への準備

管理委員会

◎デザイン姉妹　その１

リオ　来ないんだって、あの子。ハンナちゃん。
エリカ　ん、ああ、なに、ハンナ？
リオ　うん。うちにおいでよ、って手紙書いたんだけどさ。
エリカ　へえ、そうなんだ？
リオ　言ったでしょこないだ。ホラ、お姉さんの方・ユキちゃんが事前予測で一位になっちゃってたからさ、何か相談とかあったらなあ、と思ったんだけど。
エリカ　まさか妹が一位になるとはね。
リオ　ね。まだ予備投票とはいえさ――。

一拍。

リオ　そんじゃこっちから訪ねてくか？　ご飯でも一緒にさ。
エリカ　ええ？　いいよ。
リオ　なんでよ？　エリカもあんなに仲良かったんだから、行こうよ。
エリカ　行ってどうするの？
リオ　だからなんか、んー、なんかできないかなって。
エリカ　――どういうこと？
リオ　まあ、結果を変えるとかは難しいのかもしれないけどさ＝
エリカ　＝うん
リオ　でも、――なんかいい方法ないのかな、って。相談するだけでもさ、
エリカ　そもそも、あたしハンナと仲良くないよ？
リオ　ちょっとちょっと。
エリカ　★いやいや、お姉ちゃんは文通とかしてたからわかんないけど、あたしは別に。
リオ　えー、でも、よく遊んでたじゃない？
エリカ　遊んでないよ。
リオ　そんなことないでしょ。しょっちゅう一緒にいたじゃない。
エリカ　あれは、いじめられてただけ。
リオ　そんなこと言わずにさ。
エリカ　いやいやいや。
リオ　なんとかしてやれないの？　あんた今年も委員に選ばれてるんだからさあ。
エリカ　別に、委員会で選挙の結果決めるわけじゃないんだから。
リオ　そうだけど、

エリカ　だからまあ、あたしには何もできないかな。

一拍。

リオ　そんじゃちょっと相談してみようかな。
エリカ　相談？
リオ　うん。苅谷にでも会ってさ。こういう時は頭いい人の助けを借りないと。
エリカ　それがいいんじゃない？　（お追従で）強いよね、お姉ちゃんは友達多いから。
リオ　苅谷も一緒だったらあんたも来る？
エリカ　★だから行かないって。苅谷さんとはどうせ委員会で顔合わせるし。
リオ　――あ、そう。
エリカ　うん。巻き込まないで。

一拍。

リオ　なんか冷たいね、エリカ。
エリカ　同じでしょ。優しいフリしてあげたって。
リオ　フリってわけじゃないよ。
エリカ　ヘンに希望持たせたらかえってかわいそうなんじゃない？　結局、何もしてあげられないんだから。
リオ　そんなの、――やってみなくちゃわからないでしょ。

リオ、退場。

◎委員会　その１

エリカ、ロア、スー、サリ、苅谷が新しい場を形成する。
悪人選挙の管理委員会の場である。

ロア　以上を持ちまして、本年度の委員会、初回は終了ということにさせていただきます。次回は投票の直前になりますから、各自調査資料にはしっかり目を通しておいてください。
委員たち　（きびきびと）はい。
ロア　くれぐれも見落とし、誤読など起きませんようにお願いいたします。
委員たち　はい。
ロア　――それでは、散会といたしましょう。
委員たち　お疲れ様でした。

ロア、退場。

委員たちは開放されてその場を離れ、

サリ　（スーに）やあ、場違い感すごいですあたし、やっぱ全然・無理なんですけど。
スー　緊張しちゃうよねー、ちょっと。
サリ　いやいやいや、ホントだからあたしはそもそも、――そもそも、全然やりたくなかったんですよ、なのになんか、突然ヘンな、いっぱい資料が入った封筒が送られてきて、
スー　委員はねー。ランダムに当てられるから。
サリ　はじめ断ろうと思ったんですよ、ていうか断ったんですよ。でもなんか、ちゃんとした理由がないとダメだ、とかって言われちゃって、
苅谷　不安ですよね。なんか、責任がね。
サリ　そうなんですよ・ホント。
苅谷　まあでも、なっちゃったものは仕方がないですし、
スー　それなり報酬もでるわけだし？
苅谷　ですよね。だからこの際・割り切って、
サリ　★え、だからヤなんですよ、そんな、報酬なんて――
エリカ　ちゃんとやればいいんじゃないの？　報酬に見合うようにさ。
苅谷　［うんうん。
サリ　［無理ですよ！　ちゃんと、ってだって、何していいのかわかんないし、
エリカ　えー、だからまあ、ねえ。
スー　なんか不正があったら、一応そういうのに抗議できる立場なんだからさ。
サリ　抗議なんてそんな、
苅谷　抗議というか、指摘ですかね？　あなた不正がありますよって。それだけですから、
エリカ　別に、あたし達がそれ調べるわけじゃないし。
苅谷　そうですすそうです。
サリ　（苅谷に）え、どうなるんですか、不正があると？
スー　え、だからさっきロアさん説明してたじゃん。
サリ　あ、そうなんですか？　なんかあたし緊張しちゃってて、ホント、
エリカ　（サリを指して、スーに）ここまでじゃなかったよね、あたし？
スー　似たようなもんだったよ。
エリカ　ウソー。
苅谷　だからまあ、不正とかがあった場合には＝
サリ　はい。
苅谷　＝調査委員の人がそういう、なになにの不正があったと思われます、っていうのを書類であげてきてくれますんで、それで委員会の方でも必要があれば追加で調査をして――
スー　調査？　調査？
エリカ　資料請求とかでしょ？　調査っていったって。
スー　そんなのやらなきゃなんだ。
サリ　（苅谷に）え、それで、どうするんですか？

苅谷　判断するんです。話し合って。これは不正じゃないな、っていうＯＫの案件だったら、
　そのまま投票通りになって、
サリ　はい。ＯＫじゃなかったら？
苅谷　――その人が代わりに、その年の「いちばん悪いやつ」になる。

一拍。

サリ　（スーに）やっぱりじゃあ、消される人を決める、ってことですよね？
スー　まあ、そういえばそうだけど。
サリ　（苅谷に）え、正直いってあのー、委員やってるとこっちに危険が来たりとかっていう？
苅谷　んー。
エリカ　いや、そんな、危険とかはないよ別に。
スー　だからまあ、そんなに気負わなくても――。
サリ　や、気負ってるとかじゃないんですけど、なんも出来ないですし。でもなんか、責任重大だなって。
スー　なんか勘違いしてない、サリ？
サリ　勘違い？
スー　なんていうの、裁判の陪審員とかだとその人たちが実際判断して？　そんでまあ、何年刑務所に入ってるかーとか、そういうのが決まってっちゃうわけでしょう？
サリ　悪人選挙なんてもっと大変ですよね？　だって消されちゃうわけですし？
スー　［いやいやいや、
エリカ　［ま・ま・そうなんだけど、
サリ　（不安で一杯になり）あたし無理だ。スーさーん！
スー　落ち着いて、まず、
サリ　でもー。
苅谷　委員会は単に、不正がなかったかどうかを判断するだけですから。
スー　そうそう。基本・投票がすべてだし。
苅谷　あたしたちに決定権があるわけじゃないので。
サリ　でも、――不正があった場合はなんか、委員会で判断しなきゃいけないんですよね？
苅谷　んー、ま、そうなんですけど＝
サリ　＝ですよね？
苅谷　まあ、はい。
スー　そんな無いから不正なんて。大丈夫大丈夫！

サリ、納得いかない部分は残るものの一旦は落ち着いて、
一拍。

サリ　でもホント、スーさんいてくれてよかったですあたし。
苅谷　ああ、なんか、お二人はもともと？
サリ　［はい。
スー　［そうそう、そうなんですよ。なんか職場の後輩的な？
エリカ　あー、職場の？
サリ　はい。ホント頼れる先輩で。ふたりともあの、ユキさんのお店で働かせてもらってて。
苅谷　ユキさんの、あの――なんでしたっけ、ギャザー？
スー　そうそう、ギャザー。なんか、悪い方向で有名になっちゃいましたけど、
苅谷　まあまあまあ、
スー　ってあれ？　（サリに）あんま言わない方がよかったか？
サリ　や、全然、大丈夫っす。（エリカ・苅谷に）そのだから、お店の頃からいろいろと面倒見てもらってまして。
エリカ　へー。仲良しなんだ。
サリ　はい。というか愛してます。
スー　やめろよ。気持ち悪い。
苅谷　（サリに）へー。よかったですね、じゃあ。
サリ　はい。スーさんいなかったらあたしもっと全然ヤバかったっていうか、ヤバかったんですけど、でも、スーさんいるってわかった瞬間テンション爆上がりして、
スー　無視するよそういうこと言ってっと。
サリ　やだ、切ない。
スー　（苅谷に）心配性なんすよ、こいつ。大したこと無いって言ってんのに。
苅谷　まあでも、――不正があるとそれなり大変ですけどね。

一拍。

サリ　（また不安になり）やっぱり。やっぱり大変なんですよね？
スー　ああ、苅谷さんやってるとき不正とかあったんですか？
苅谷　うん。あたしが担当した最初の年。だから割と、ちょくちょくありますよ、不正。
サリ　え？　お二人の時はそういうのは無くて？
スー　ないない。
エリカ　ま、三年交代だから、そんな前のことは知らないけど。
サリ　ああ――
スー　（サリに）あんた資料、見てないの？　あの、送られてきたやつ？
サリ　やあ、まだ。委員になったってことで頭パンクしちゃってて、
スー　そっか・そっか。ま、でもね。こればっかりは順番だから。
エリカ　ね。
サリ　はい、もう、がんばる、しかないですよね――。
エリカ　［そんなそんな、

スー　［だから、がんばんなくていいの。エリカのがずっと大変なんだから今回は。
サリ　ああ、そうなんですか？　エリカさん？
エリカ　いや、あたしは別に。
スー　（サリに）友達なんだって、あの、いちばん悪いやつ。
サリ　えー？　お友達なんですかあの、――ハンナさん？
スー　らしいよー。
エリカ　友達っていうか、まあ、知り合い？　ただの同級生ってだけなんだけど。
サリ　でも、ハンナさんが消されちゃったら、もう、あれですよね、――二度と会えなくなっちゃうっていうか、
エリカ　そうねえ、まあ、
苅谷　原則、話題に上げることも、思い出すことも禁止ですから。

一拍。

サリ　できるんですか、そんなこと。
スー　（エリカに）がんばって。
エリカ　ヒトゴト！
スー　（サリに）しかもあれだよ、それユキさんの妹だからね。
サリ　妹？　え、そうなんですか？　ユキさんの？
エリカ　妹、――というか双子だからね、ユキとハンナと。
サリ　ああ、双子？　え、ユキさんって、双子だったんですか？
スー　有名な話じゃん。
サリ　やあ、あたし全然（知りませんでした）――。え、え、じゃあ、それってなんか、――こういう、繋がりみたいな・あるんですかね？
エリカ　繋がり？
サリ　や、あたしてっきり今年はユキさんが選ばれちゃうんじゃないかって思ってて、なんか噂ではユキさん一位になるんじゃないかー、とかって話だったじゃないですか？
エリカ　そうね、事前予測でもそう出てたし、
サリ　ですよね？　お店のこととかもいっぱいあったし／や、うちら（スーとサリ）は全然、ユキさんのこと知ってるからそんなユキさん悪い人じゃないってわかってますけど／むしろいい人っていうか／お店の子とかは全然そうだと思うんですけど、
スー　まあね、でも、――ユキさん、は、まあ、なんていうか――。
サリ　誤解されやすいっていうか、――そうなんですよ！　だから全然、今年はユキさんになっちゃうのかなあ、とか覚悟してたんですけど、でも、ハンナさん？　妹さんが、っていう話だったらなんか、
スー　そうね。どっちにしろユキさんしんどいよね。
サリ　はい。なんかだって、酷くないですか？　ユキさんて親御さんも昔・消されちゃったっていうし、なんか狙い撃ちみたくされてるっていうか、

苅谷　★あー、やめません？　そういう話。

一拍。

サリ　え・え・え？　あ、なんか・すみません、あの、
エリカ　うん。消された人の話は（しないで）、
サリ　［ああ、
苅谷　［だいたい今年は誰が一位とかあんまり委員がする話じゃないと思ってて、あたしはね、少なくともこういう場ではしない方がいいんじゃないかなあ、って、うん。思うので。

間。

サリ　（深々と頭を下げ）申し訳ありませんでした。
スー　うんうん、まあ、気をつけて。（苅谷に）すみません、なんか、（サリに）別にあたしらの前だったらいいんだけどさ、
苅谷　良くないでしょ。良くないですよ。
スー　や、そうですけど、
エリカ　うん、でも、ロアさんとかの前だったらもっとまずいから。
サリ　ああ、委員長、ですよね？　ロアさん。
スー　そうそう。厳しい人だから。
サリ　はい、なんか。肝に銘じます。
苅谷　じゃ、あたしはそろそろ――。
エリカ　あ、帰っちゃうんですか？　苅谷さん、
苅谷　はい。友達と約束があって。
スー　残念。せっかくお話できると思ったのに、
エリカ　ねえ？
苅谷　やっぱり、――委員同士はあんまり仲良くするもんじゃないですよね。

一拍。

スー　あーいや、すみません、なんか。
苅谷　いえいえ。それじゃさよなら。次の委員会で。
エリカ　あ、はい。
スー　また、何日かしたら、
エリカ　お疲れ様でしたー。

苅谷、退場。

◎委員会　その２

サリ　――あたしのせいですよね？
スー　［いやいやいや、
エリカ　［そういうんじゃないから！
サリ　え、絶対そうですよ、すみません、ホントに。
エリカ　いいのいいの、［大丈夫だって。
スー　［ちょーっとね、ちょーっとだけ、固すぎるんだよ、苅谷さん、
エリカ　まあ、悪い人じゃないんだけどさ。
スー　そうそうそう、悪い人ではないんだよ。というか今のはお前が悪い、
サリ　わあ、すみませんホント。ですよね絶対。（エリカに）申し訳ありませんでした。
エリカ　平気、平気、気にしないで。
サリ　はい。すみませんでした。
スー　でも、ちょっとエリカは複雑な感じ？
エリカ　ん？　何が？
スー　だってあれでしょ？　（サリに）なんか昔、いじめられてたっていうからさ、その、いちばん悪いやつに。
サリ　ああ、エリカさんが？
エリカ　や、別にあたしが特に、ってわけじゃないんだけど、もう酷かったのよ、当時、ふたりとも。
サリ　ああ、いじめっていうか？
エリカ　というか悪事全般？　でも、違うよ。ユキもハンナも別にそんな、本当の本当に悪い人ってわけじゃないと思うけど。
サリ　あー。
スー　とはいえ、ナンバー・ワンだけどね、今年の。
エリカ　や、そうだけど！　でも、本当は別に。
スー　じゃ、どこにいるんだろうね？
エリカ　え？
スー　本当の本当に悪い人。
エリカ　うーん。ね？

間。

スー　もうじゃあさ、飲みにでも行っちゃう？　パーっとさ。
サリ　（喜んで）ええ？　いいんですか？
スー　へーき・へーき。苅谷さんいなくなったらまた話せることもあるし？
エリカ　（サリに）悪い先輩だ。
スー　［ちょっと、エリカ！

サリ　［いやいやいや、――最高っす。愛してます。
スー　だからもう、――あ、じゃあ、エリカとふたりで行こっか？
サリ　ええ？
▲スー　だって、サリ、え？　予定あるでしょ？　［忙しいよね？
▲サリ　［何も無いっす。ヒマ、ヒマヒマ、超ヒマっす。
▲エリカ　よしよし、じゃあサリちゃんも一緒に、ね？
▲サリ　はい！　ああ、いや、――エリカさんが良ければ、ですけど、
▲エリカ　大丈夫だって。
▲サリ　いいんすか？　お邪魔でなければご一緒させてもらいたいんですけど、

三人、退場。

◎委員長の憂鬱　その１

アン、ロアが登場して新しい場を形成する。夜。

アン　ようやく眠ってくれましたー。
ロア　ああ、そう。カナ、ご機嫌斜めだったねえ。
アン　寝顔は天使なんだけどねえ、ホント。
ロア　ごめんねなんか、いつも任せっきりで。
アン　いえいえ。お仕事忙しいでしょうから。
ロア　ごめんて。アンだって仕事あんのにね。
アン　まあ、あたしは別にね。気楽な公務員ですから。
ロア　あたしだって公務員だよ。
アン　でも気楽ではないじゃん？／というかそうだ、聞いてよ！
ロア　なになに？
アン　いや、職場の後輩のことなんだけどね。今日も配達ミスがあって、
ロア　あらー。
アン　ホントありえないミスが多いからさー、「なんか動揺しちゃってて」とかいって、何年やってんだよお前、って、そんですぐいい訳するしさあ、
ロア　こないだのあの、――パムちゃん？
アン　そう！　確かに年末は忙しいけどさ、それにしたって、――誤配とか「タマにはあるよねー」ってレベルのミスじゃないから、
ロア　まあ、大事なものも多いだろうし？
アン　信用に関わるから！　ただでさえ近頃は苦情だらけなのに。
ロア　あー、苦情だらけなんだ？
アン　うん。なんか郵便物にヘンなビラが混ざってたー、とかいって？　怪文書みたいなやつがいっぱい撒かれてんだって。

ロア　それは郵便屋さんのせいじゃないのにね。
アン　そう！　うちらのせいじゃないのに苦情来まくって。そんな時に配達ミスって、もっと慎重にやろうよ、って。
ロア　フフフ。アンちゃんご立腹だ。
アン　ご立腹だよ。怒髪天をつくよ。
ロア　なにそれ（笑）
アン　あー、でもすっきりした。いつか言ってやろうと思っててずっと。
ロア　あ、本人には言ってないんだ？
アン　ううん。――言ってる。
ロア　なによ（笑）
アン　でもほら、すぐいい訳ばっかするから？　「悩みがあるんですよ、あたしなりに！」とか言っちゃって、仕事に持ち込むなテメえの悩みを。だからカナは絶対、いい訳ばっかする人間にだけはならないように育てよう。ね？
ロア　まあまあ、アンちゃんも後輩を指導する年になったってことだよ。
アン　わー、やめてそんな言い方。
ロア　だってそうじゃない？
アン　そうだけどォ！　でも、まだまだ後輩させてもらいたかったっていうか、やっぱあたしってなんていうの、集団の中で一番の若手？　みたいなポジションが合ってると思うんだよね。赤ちゃん時代が絶頂期っていうか、天職なんだよね、天職。
ロア　天職って言わないよ。でも偉いじゃん。ちゃんとお母さんしてて。
アン　それは半ば強制的にね。だからその点、ロアはえらいよなーって。
ロア　――あたし？
アン　なんか学生のころからずっと上の立場っていうかさ、リーダーみたいな感じのこといつもしてくれてたじゃん。
ロア　そんなつもりじゃないけど。
アン　いや、してたって。あたしにはできないことだよー。
ロア　まあ、――ずっと言われてきちゃったからね。そうやって。
アン　ああ、町長の娘なんだからしっかりしろ、みたいな？
ロア　なんていうか、――嫌われ者だから、あの人。
アン　そりゃ立場のある人なんだから。悪く言う人もいるよ。
ロア　だから、うん。慣れちゃったのかもね。

一拍。

アン　寝れてないんでしょ、最近？
ロア　えー？　別に。
アン　うそ。一晩中、寝返りばっか打って。
ロア　あんたも起きてるってことでしょ、それ？

アン　そりゃ隣りでこんなピリピリしてる人がいたら呑気に寝てられないでしょうよ。
ロア　じゃあ、カナの夜泣きもあたしのアレか（笑）
アン　いや、いいんだけど。普通のことじゃないもんね。
ロア　ん？
アン　誰かが消されちゃうなんて。
ロア　ああ、――そうね。
アン　そりゃ大変なお仕事だよ。
ロア　いいからそういうの。
アン　何がよ？
ロア　取ってつけたみたいな優しさ。
アン　取ってつけたみたいな意地悪よりいいでしょ？
ロア　はいはい。ありがたいことだけどさ、いーの、あたしは。
アン　やっぱりなに、今年はハンナで決まり？
ロア　（離れて）たとえ家族とであっても、選挙に関する話はしない！
アン　フフフ。――まあ、そうか。
ロア　うん。
アン　――タマには弱音吐いたほうが健康にいいぞ。
ロア　まあ、終わってからね。終わってから。

一拍。

▲アン　それまではあたしも覚悟しとくか。
▲ロア　んー？
▲アン　睡眠不足。
▲ロア　ごめんごめん。あー、別々で寝る？
▲アン　覚悟するって言ってるだろー。

場面転換。

思い出

◎リオ、苅谷

リオと苅谷がいる。どこかの喫茶店。

リオ　まあ、そんなわけで一応？　抗議するだけしてみようかなって思ってるんだけど――。
苅谷　うーん。無駄だと思うよ。
リオ　まだハンナに決まったってわけじゃないでしょ？　実際の投票はしてないんだし、
苅谷　ほぼ、決まりだと思うけど。
リオ　なんでよ？
苅谷　だって、予備投票一位だった人は大体、本選挙ではダントツの一位になるしね。
リオ　ああ、なんでなんだろうね？　あれ。
苅谷　それが一番、罪悪感を感じないで済むからじゃない？
リオ　んん、じゃ、なに？　苅谷も諦めろって？
苅谷　諦めろとは言わないけど――。
リオ　うん、言わないけど？
苅谷　しょうがないんじゃない？　投票の結果なんだから。
リオ　えー？　じゃあその、投票の結果が間違えてたら？
苅谷　――みんなで間違うしかないんじゃない？
リオ　そんな！
苅谷　だからそうならないように、みんなでちゃんと考えて投票しないといけないんだよ。

リオ、苅谷と距離を取りつつ、

リオ　極論・思うんだけどね、あたしは。
苅谷　うん。
リオ　悪人選挙って制度そのものを潰さなきゃダメなんじゃないの？
苅谷　まあ、それは、極論だね、［確かに――。
リオ　［ま、そうだけど、そうなんだけど、
苅谷　まあでも、最終的にはね。なんか別のシステムが見つかったらいいなあ、っていうのは、あたしも思う。
リオ　だって、おかしいからね？　いちばん悪いやつを決めるっていったってさ、そんな単純に決まるもんじゃないでしょ？＝
苅谷　（何度かうなずく）
リオ　＝不倫が悪いって思う人もいるし、詐欺が悪いって思う人もいるし、極論、人殺さなきゃなんだっていいって思う人もいるわけでしょ？
苅谷　――でも、いいところだってあるんじゃない？

リオ　えー、ないない。
苅谷　お互い、気を遣うようになるし。
リオ　なるかな？
苅谷　なるでしょ。選挙で名前書かれないようにみんないい子にしてるじゃない？　人助けをしたり。誰かにプレゼントをしたり＝
リオ　＝それはさあ、
苅谷　いろいろと、気を遣うでしょ？
リオ　いや、あのね、それが一番良くないとこなんだよ。だって、すっごくいい子な感じになるでしょ、みんな？　でもそれは「感じ」だけなの。本当に「いい」わけじゃない。ウソの優しさっていうか、なんていうの、ニコニコしてるだけなんだよ。
苅谷　――ニコニコしてちゃいけないの？
リオ　ヤじゃない？　なんか。人に優しくされても「ポイント稼いでんなー」ぐらいに思っちゃうし、「あ、こいつ――」みたいな？
苅谷　ああ。
リオ　だから結局、人と関わること自体すっごく億劫っていうか、「（イライラして）イーッ」って、なっちゃうからさ。
苅谷　へー。リオでも「イーッ」ってなるんだ？
リオ　いや、なるよ、すっごい。エリカとなんていつもそうだし。
苅谷　え、でもさ・でもさ、
リオ　なになに？
苅谷　実際その、エリカちゃんをいじめてた？　感じだった双子のために、こうやってあたしとお話しにきてるわけでしょ？　面倒臭がってないじゃない。
リオ　いや別に、今日はそれだけじゃないもん。久しぶりに苅谷に会いたいなあ、ってのもあったし、
苅谷　――あーなに、今のもポイント稼ぎ？
リオ　なんでそういうこと言うの？
苅谷　そうじゃないだろうなあ、と思ったから。

ふたり、少し笑う。

リオ　――なんか、窮屈なんだよねー。なあんかー。
苅谷　なにが？
リオ　みんな口ではさ「好きにやればいいじゃーん」みたいなことといってっけどさ＝
苅谷　うんうん。
リオ　＝実際好きにやったら後ろ指さされたり？　お互いの評価ばっか気にして、なあんかさー。
苅谷　え・じゃあ逆にリオはさ、なにか選挙以上の方法って思いつく？
リオ　んー、――無い。

苅谷　無いんかい（笑）
リオ　あはは。わかんないよ。
苅谷　でも、仮に選挙が無かったとしたらさ、
リオ　――うん。
苅谷　今よりもっと、人にやさしくできるかな？
リオ　できるできる！　そりゃ、あたしだって選挙がなくなったら何もかもうまくいく、なんて思わないけどさ、
苅谷　うん。
リオ　でも、――今よりはずっとこう、なに――（手を動かす）
苅谷　（手を動かす）――？
リオ　のびのびしてたと思う。
苅谷　ウソでしょ。リオ、のびのびしてないつもりなの？
リオ　いや、もっともーっと自然な感じで？　もう、なに？　人がなんと言おうが関係ない！　みたいなさ。ゴーイングマイウェイな感じの人が増えんじゃない？
苅谷　やっぱりこの制度はあった方がいいよ。――リオのために。
リオ　ちょっとそれ、どういう意味？
苅谷　ウソウソウソ。

ふたり、笑う。

リオ　あ、そうだ、苅谷、今日委員会でエリカに会った？
苅谷　ん？　会った会った。
リオ　なんか言ってた？　ユキとハンナのこと？
苅谷　いや、――特には。
リオ　やっぱなあ。冷たいんだよな、あいつは。
苅谷　普通でしょ。むしろ、どうしてリオはそんな・双子にこだわるの？
リオ　そりゃだって、楽しく遊んでたしね、昔。
苅谷　でも、――エリカちゃんは、いじめられてたわけでしょう？
リオ　違うって。いじめられてたってわけじゃなくて、
苅谷　忘れないものだよ。いじめられた側は。
リオ　そう！　なんかね、そういう思い出としてくくられちゃってるんだよね。
苅谷　え、何かあったの？　エリカちゃんと。
リオ　――別に。何もないけど。
苅谷　何もない、けど――？
リオ　もうずっとギクシャクした感じだよ。ずーっと。
苅谷　ふーん。
リオ　だんだんズレていった感じ？　私はなんも無いんだけどさ、エリカの方ではいろいろあんじゃないの？

苅谷　せっかく仲良しだったのにね。
リオ　まあ、家族だから仲良くできるってもんでも無いし。
苅谷　そうかあ。
リオ　いいんだよ、あたしの話はいったん。今日はユキとハンナの話だから、
苅谷　ごめんごめん。▼だけどなんか、――繋がってる話なのかなあ、と思って。

◎一輪車泥棒

場面、回想シーンとなる。
リオ、その傍に絵梨花がいる。
それに相対して、ハンナ、ユキがいる。ふたりは一輪車で遊んでいる。

リオ　ちょっといい？　ねえ、ちょっといいかな？

一拍。

ハンナ　は？
ユキ　なに、うちらに言ってんの？
リオ　そうそう。今、ちょっといいかな？
ハンナ　はあ。
ユキ　なんか用すか？
リオ　いや、ちょっとエリカ／妹から聞いたんだけど、えーと、なに、とりあえずそれ返してもらっていいかな？　エリカのだからさ、それ。

間。

ユキ　（恐縮して）えーと、すみません。――なんの話ですか？
ハンナ　（恐縮して）ちょっと言っていることが［よくわからないんですけど、
リオ　［だから一輪車！　わかってるでしょ。返してよ。

一拍。

ユキ　いや、くれるって。
ハンナ　ねえ。くれるっていうから。
エリカ　［ええ――。
リオ　［あのさあ、え、じゃあ、なんで？　なんでエリカが自分の一輪車をあんたたちにあげるわけ？

間。

ユキ　や、それはわかんないですけど、
ハンナ　ま・でもくれるっていうから、
ユキ　［そうそう、
リオ　（エリカに）［え、言ってないよね？　――言ったの？
エリカ　言ってない。
ハンナ　★おい！
ユキ　てめ、ふざけんなよ。言ったじゃんか、くれるって。
ハンナ　殺すぞ。
リオ　やめてやめて、そういう、殺す、とかはやめて。
ユキ　だっていったんだもん、こいつホント。
ハンナ　ふざけんなよ、てめえ。
ユキ　え、うちらがなんか、貸して欲しいなあ、って言ってたら貸してくれて＝
ハンナ　＝そんでなんか、ねえ？
ユキ　そう、なんか一輪車の色の感じとかがちょうどハンナに似合ってる感じだったから、な
　んか、
ハンナ　「あれー？　似合うんじゃね？」
ユキ　みたいな？＝
ハンナ　＝そう、そういう感じの話になって、
ユキ　そんで、そしたらなんか、
ハンナ　「え、じゃあ、いいよ、それ」
ユキ　「え？　うそ？　もらっちゃっていいの？　悪いよー」
ハンナ　「うん。でも、なんか似合ってるし」
ユキ　「わー、ありがとう」
ハンナ　［みたいな？
ユキ　［みたいな？
エリカ　言ってない！　ひとつも言ってない！
ユキ　言っただろてめえ。
ハンナ　なめてんじゃねえよ、カタチ変えちまうぞ。
リオ　やめてやめて、そういう、カタチ変える、とかはやめて。
ユキ　とにかくそういうこと言ってたんで／じゃあ、じゃあ、うちらも・もらっちゃおうか
　な、っていう、
ハンナ　ちょうど欲しかったし。
ユキ　あって困るものじゃないし。
ハンナ　そうそう、あって困るものじゃない。
リオ　いいから。もうそういうのいいからとりあえず謝って＝
ハンナ　＝はあ？

リオ　もう、それで終わりにしてあげるから。

間。

ユキ　謝るって、誰が？
ハンナ　誰に？
ユキ　何を？
リオ　エリカに謝って。ってそんなの決まってるでしょう？
ユキ　――え？　謝ったらなにかくれるんですか？
リオ　は？　何もあげないよ。
ハンナ　えー。
ユキ　しょっぼ。
リオ　あげるわけないでしょ。悪いことをしたんだから謝るの！　そんで返して、早くそれ。
ハンナ　なになになに、どういうこと？
ユキ　意味わかんない・意味わかんない。
ハンナ　だって、（エリカが）くれるって言ったのに？
ユキ　どーしてそういう話になるんですか？
リオ　あんたらがしたことはマイナスのことなんだから、ちゃんと謝ってちゃんと返して。子供だからそれでいいよって言ってあげてんの。
ユキ　――謝る理由がわからない。
ハンナ　なんの得があるんですか？
リオ　だから、得とかじゃなくて、謝ってちょうどそれでプラマイゼロになるぐらいの話なの。人のもの勝手に盗っておいて、それで謝らなかったらマイナスでしょ！

ユキ、ハンナ、顔を見合わせ、得心のいかない様子。

ユキ　――まあまあ、お話は、わかりました。（ハンナに）何もくれないんだって。
ハンナ　驚いたね。実際。
リオ　いいから謝んなさいよ！
エリカ　（泣きそうになりながら）もう、いいよ、いいよ、いいよお姉ちゃん、もう、いいよ。
リオ　よくない！　バカ！　泣くな！
エリカ　だってなんか、もう、いいよ。［一輪車は、もういいから。
ユキ　［あのあのあの、ちょっ・ちょっ・ちょっ・ちょっとすみません＝
ハンナ　＝結論が出た模様なんですけど、
リオ　早くして、もう。
ユキ　（申し訳なさそうに）いや、あの、うちら、謝らない、――ですね。
リオ　は？　なんで？
ユキ　いや、なんでって、（ハンナを見る）

一拍。

ハンナ　気分が悪いから？
ユキ　それか！　然り！
ハンナ　然り！（笑）
ユキ　謝るのは、気分が悪い。
ハンナ　だから謝らない。

二人、然り、イエー、などといいながらハイタッチ。

ユキ　そして返しません。
ハンナ　もらったものなので。
リオ　ちょっとふざけん／いい加減にしなさい、あんたたち！
エリカ　もういい！　もういいよ！　お姉ちゃん。ごめんごめんごめん。［私が悪かった。私が悪かったよー。
リオ　［なになに？　なんでよ？　なんで？
ユキ　なに泣いてんの？
ハンナ　ウケんだけど。
ユキ　ぶっさ。え、ちょっと待って・ちょっと待って、――ぶっさ。

ふたり、退場しようとする。ユキは一輪車に乗って愉快な様子で。

リオ　ちょっと、待ちなさい！　［やめ、なんなのあんたたち！　いい加減にしなさいよ！
エリカ　［もういいから！　あげるあげる・あげるから！　ごめんごめん。お姉ちゃんごめんなさい。
リオ　なんで悪くないのに謝るの！　謝るな！　あの子たちは一言も謝ってないのに、――もうっ！

苅谷　ま、そういうとこあんのかもねえ。エリカちゃんは。
リオ　そう。昔っから泣き虫でさあ。
苅谷　でも、あれ？　リオ文通してたんでしょ、そのふたりと？
リオ　してたしてた。
苅谷　なんかそんなことやりそうもない印象だけどね。
リオ　あたしもだから最初びっくりしたんだけど、／いや、当時あいつらもう滅茶苦茶だったからさあ、他人の手紙を盗み読んでるうちにやりたくなったみたいよ、自分たちも。
苅谷　手紙を盗むって、なに、ポストから抜き取って？
リオ　いや、それがさあ、もっと全然大胆な方法で。

◎郵便屋、襲撃

アン、走って通りすぎる。
ユキとハンナが罠をしかけて、アンを転ばせようとする。
が、アン、直前でそれを察して転ばずに済む。

アン　ちょっちょっちょっ、危ないなあ！
ユキ　ちっ
ハンナ　転べよ。
アン　ええ？　なになに？
ハンナ　せっかくいい作戦だと思ったのに。
ユキ　［タイミングじゃね？
アン　［なん、なん、なに？　なんですかちょっ、危ないじゃないですか！＝
ハンナ　申し訳ありませんでした、リアルに。
アン　＝ひもが、ひも・ひもが、ニューって、
ユキ　ちょっと待って、落ち着いて落ち着いて、落ち着いてください。今からあの、ハンナからご説明さしあげますんで、
アン　ご説明？
ハンナ　あのちょっと、大変恐縮なんですけど、ちょっと郵便、の、あの、なんていうんですかね、ちょっと見せてもらってもいいですか？
アン　ダメですよ。な・なんで？
ハンナ　いやいやいや、ダメとかじゃなくて。
ユキ　ダメとかじゃ無いじゃないですかあ？
アン　ええ？　ダメに決まってるでしょ。
ユキ　え、なん、で？
アン　ちゃんとお手紙をお届けするのが仕事ですから。
ユキ　まあまあまあ、存じておりますよ。
ハンナ　話だけでも聞いてやってくださいよ。
アン　ちょっとやめてください、帰ります帰ります！　（その場を離れて歩き出す）もう、これだからカタスミは嫌なんだよ。（チラっと二人を見て）民度低すぎるでしょ。
ユキ　（ダメージを受け）あ、あー、［あー、
ハンナ　［あー、あー、いいんですかそんなこと言って？　完全に差別発言ですよ今の？
アン　（狼狽えて）ああ、いや、［そういうつもりじゃ、
ハンナ　［傷ついたー。これは本当に傷つけられたなあー。
ユキ　人間としての尊厳を踏みにじられた。
アン　ああ、すみません、そんなつもりで言ったんじゃないんです、

ハンナ　いや、そこでひとつご相談なんですがね、あのー、違うんです。さっきのはあの、そういう、盗るとかじゃなくて／そんな盗らないですようちらだってそんな、ねえ？
ユキ　うん。ひとさまのお手紙を盗るいわれが無い。
アン　でも、現に盗ろうとしてたじゃないですか？
ハンナ　違うんです・違うんですよ。あのー。母が、あの、
アン　母？
ハンナ　はい。あの、母が、あ、あー、そう、うちらあの、みなし子と申しますか、母がおりませんものでね、
アン　ああ、お母さまが――。
ハンナ　そうなんですよ。ですから、ちょっとその／いや、恥ずかしい。恥ずかしいなあ。
ユキ　言いなよ。言いなって。
ハンナ　わかってるわかってる。
アン　なん、なんですか？
ハンナ　母の行方を探しているんです。

間。

ユキ　ウソじゃありません、本当です。つまり、トゥルースです。
ハンナ　まっすぐな、心！

一拍。

アン　そ、それとこれと、どういう関係があるんですか？
ハンナ　★あー、ですよね。関係ないじゃないか、バカヤロウッ、そう思いますよねー？
アン　そ・いや、バカヤロウとは思わないですけど――、
ハンナ　いやねー、長いこと母を探しているんですが、風の噂によりますと、母はどうやら偽名を使って暮らしているみたいなんですよ。
アン　偽名？
ハンナ　ええ。まあ、どういう事情かは知りませんが、きっと何か、子供にはあずかり知らぬ複雑な事情があるんでしょう。だから、母を訪ねようにも訪ねようがない。
ユキ　つらし。
ハンナ　ところがですね、ここにいるこのユキ、
ユキ　あ、ユキです。申し遅れまして、これは失敬（握手を求める）
アン　（握手に応じて）あ、どうも。いや、
ハンナ　こいつあのー、指紋がね、見えるんです。
アン　指紋が見える？
ハンナ　ええ。普通でしたら、もう、ね、なんか事件があってもホラ、科学捜査班のみなさんが一生懸命白いパウダーのついたポンポン状のポンポンを使ってこう、たくさんポンポン・ポ

ンポンしなければいけないところなんですが、なぜかこいつにはポンポンなしで指紋が見えるんです。

アン　ホントですか？

ハンナ　ポンポンレス。

ユキ　いや、むしろ見えない人の気持ちが見えてこないっていうかー、

アン　すごい。

ユキ　ただの生まれつきです。

アン　それがすごいんですよ！　見えるんですか？　え・え・どんな風に？

ハンナ　（打ち消すように）★そォんなわけでですね！　――その郵便の中から封書やハガキについた指紋を見せてもらい、それを通じて母を探し出そうと、我々がしているのはそういう、なんとも涙ぐましい、ワラにもすがる、イタチの最後っ屁のようなことなんです。

アン　はあ。イタチの。

ハンナ　ですからぜひ、少しの間だけその郵便物を見せていただけないでしょうか？

ユキ　ホントすぐ返します。ひょっとして、の、ひょっ、ぐらいのタイミングで返しますから。

アン　ひょっとしての、ひょっ、っていうと――あ、すぐですねえ。

ハンナ　ええ、ほんの少し見せていただくだけでいいんです、

アン　いや、もう、それぐらいのことでしたら、私もなにかお手伝いを、

といって、アン、郵便物の入っているカバンをハンナに渡す。

ハンナ　（受け取りつつ）かたじけない。

▲ユキ　いやあ、これはかたじけないね。今世紀最高のかたじけなさ。

▲ハンナ　キリスト生誕以来の珍事ですなー。

▲アン　ああ、はい。そう、なんですか？

ハンナ、ユキ、郵便物の中身を確認しつつ退場する。追って、アンも退場。

苅谷　ひどすぎるでしょ、こんなの。

リオ　まあ、だから悪い双子ではあったんだけどね、――それでも、手紙を盗み読みしてるうちにいろいろ勉強したこともあったみたいで、

苅谷　ああ。

リオ　あの話とかすごく気に入ってたよ。「セイラとポールの話」

苅谷　え・それって――。

リオ　そう、苅谷先生の処女作？

苅谷　ウソでしょ？　あれも読まれてたの？　最悪、あんな駄作を――。

リオ　そう？　でも、ふたりは気に入ってたみたいよ。

◎盗んだ手紙。「セイラとポールの話」

舞台上、別の場所に、ユキ、ハンナ、再び登場。

ユキ　セイラはポールを好きになって、

ハンナ　ポールに沢山のプレゼントをあげました。

一拍。

苅谷　ふたりで一緒にいろいろな場所にいって、レモン・ケーキを食べて、浜辺を歩いて、サングラスをかけて、日食を観察して、そうしてそのあと、ポールは別の、レーナという女の子のことを好きになって、セイラとは会わなくなりました。――あんなに楽しそうにしていたのに、どうしてポールはセイラのことを忘れてしまったんでしょう？　どうしてレーナの所へいってしまったんでしょう？

ユキ　飽きたんだよ。

ハンナ　太ったんじゃない？

ユキ　違う違う・わかった。ババアになったから。

ハンナ　それか。

苅谷　そのうちポールは具合が悪くなって、寝てばかりいるようになって、汗をいっぱいかいて、セイラのレモン・ケーキを欲しがりました。「セイラ、あの時のレモン・ケーキをもう一度食べたい」。――セイラはそう書かれた手紙を受け取って、一生懸命レモン・ケーキを作って、レーナのお家で寝ているポールのところへ、それを届けにいきました。レーナは、ありがとうありがとうとお礼をいって、頭を下げて、それからケーキを捨てました。――セイラはゆっくりレーナを刺して、ナイフに付いた血を拭いて、レーナのお家のキッチンで、新しいレモン・ケーキをオーブンに入れて、それをポールに食べさせました。ポールはおいしそうにそれを食べ、何日か笑って死にました。セイラは大きな穴を掘って、ポールとレーナをそこに埋め、それからずっと牢屋の中です。――いちばん、悪いのは誰ですか？

ハンナ　あー、わかったわかった。レーナのがおっぱい大きかったんじゃね？

ユキ　やめろやめろ！　おっぱいなどというものはこの世に無かったことにして生きていこうと誓った私たちだったはずだ。

ハンナ　あ、そうだそうだ・そうだった。

ユキ　バカバカバカ、ブスデブバカ。

ハンナ　ごめんごめんごめん、ブスではない。デブではない。

リオ　とまあ、大体そういうわけなのよ。

苅谷　ふーん。え、それでなに、文通でもしましょうかって、リオから誘ったってこと？
リオ　いや、そういうわけじゃないんだけどね、

◎一輪車を返す。

ユキとハンナがリオのところへ。

ユキ　あのー、やっぱりこれ、返します。

一輪車を返す。

リオ　どう、かしたの？　や・まあ、当たり前なんだけど。
ユキ　まあ、なんか、はい。
リオ　ありがとね。
ハンナ　いや、あのー、その代わりと言っちゃあなんなんですけどね、そのォ／やあ、恥ずかしい、恥ずかしいなあ。
ユキ　言いなよ、言いなって。
ハンナ　わかってる・わかってる。
リオ　な、なに？
ハンナ　文通してもらえません？
ユキ　あたしたちと。
リオ　――文通？　って、手紙のあの、
ハンナ　そうですそうです、その文通。
リオ　まあ、いいけど――。え・あたし？
ユキ　はい。ハンナが年上の女の人と文通したいっていうから。
ハンナ　おめえもだろ。
ユキ　いや、あたしは別に。
ハンナ　はあ？　言っただろうがてめえ。
ユキ　［言ってねーし。
リオ　［わかった、わかったけど、じゃあ、なに、――書けばいいのね？　お手紙。
ユキ　はい。そういうことっす。
ハンナ　いいんすか？　――あざーす。

場面転換。

【3】家族のようなもの

作戦会議

◎作戦会議　その１

ユキ、ハンナ、ミーアがいる。
ハンナが一番端っこに。それより内側にユキ。さらに内側にミーア。
ヤヨイがパムを部屋に案内して招き入れている。

ヤヨイ　どうぞどうぞ、こちらへ、
パム　いやいやいや、困ります、そんな。
ヤヨイ　いいからいいから、ちょっとだけ、ちょっとだけ、ね。いつもがんばってるから、ご苦労さまです、っていうだけだから、
パム　でも、でもあたし勤務中ですし、
ヤヨイ　ちょっとお茶するぐらいだったら平気でしょう？　こんな冷える日に凍えながら配達してても効率あがらないよ？
パム　や、まあまあ、――はい。

パム、半ば強引に椅子に座らせる。
すぐにミーアがカップを持ってくる。

ミーア　お砂糖いれちゃって良かった？　ミルクティー。
パム　ああ、はい。――ありがとうございます。

間。

パム　それであの―、――お話っていうのは？
ヤヨイ　うん、そんな特別にね、このお話っていうことじゃないんだけどね、ちょっといろいろとその、大変な状況になってるわけじゃない？　うちの家族。
パム　まあ、そ、そうですね。
ヤヨイ　いろいろと不思議で。わからないのよ私たちも。
パム　はあ、――わからない？
ユキ　なんか知ってんじゃないの？　と思ってさ。今回の結果について。

一拍。

パム　いや、――特には。

ユキ　あたしがトップっていうならわかんだよ。まあ、めちゃくちゃ評判悪いわけじゃない、あたし？　ていうか、知ってるよね、あたしのこと？
パム　ああ、はい。もちろん、ユキさんのことは。
ユキ　ねえー。ちょっとした有名人になっちゃったからさ、悪人選挙も正直・分が悪いかなあ、って心配してたわけ。そりゃそうでしょ？　今年、この町で誰がいちばん悪かったか、っていったらさ、なに？　「違法操業で風紀を乱すようなお店を経営して」？　「ボロい商売で金儲けしまくってた」あたし以外誰がいんの、って話じゃない？
パム　や、――まあ、そんなこと思ってませんけど。
ユキ　いいのいいの、今日はそういうおべんちゃらはいいからさ。

一拍。

ユキ　教えて。何か知ってることあったら。
パム　やあ、――というか、え？　なんで、――あたしなんですかね？
ミーア　そうだよね、急だもんねえ。
パム　――はい。
ヤヨイ　なんかいいたそうだったじゃない、こないだ？
パム　こないだ？
ヤヨイ　あの、配達に来てくれた時？
パム　ああ、あれは。――いや、あれは単に／いや、まず、すみません。そういうなんか、思わせぶり、っていうか、匂わせるみたいな態度だったらあたしが悪かったんで、それは申し訳ないんですけど＝
ヤヨイ　うんうん。
パム　＝でも、んー。あれは単にその、あ、もちろん、あたしはあたしで結果について知っていましたから、町民の一人として。ここに、配達に来る前に。
ミーア　あー。
パム　ハンナさんのことも配達する時にはもう知っていたから、なんていうか、――大変ですねえ、っていうか、そういう気持ちで、
ユキ　じゃ、なに？　単にお見舞いの気持ちだったと？
パム　まあ、まあ、はい。単に、――そういうことです。

間。

ユキ　てめえ、本当に何も知らねえんだろうな？
パム　いや、――はい。
ユキ　実はいろいろ知ってましたー、とかあとになって言い出したらタダじゃすまねえからな。
パム　いや、あの、

ハンナ　やめて、そういうガラの悪い。
ユキ　うるせえな黙ってろよ。
ハンナ　しょうがねえだろこんな、配達の子に八つ当たりして選挙結果が変わんのかよ。
ユキ　そんなこと言ってねえだろ誰も。
ハンナ　じゃ止めろよ、そういう話し方、
パム　あ、あの！　あたし、――はい、配達に戻らないと、いけませんので、
ミーア　ああ、そう？　もう少しゆっくりしてったら？
ヤヨイ　ねえ、せっかくお茶も入ったんだし、
パム　いや、勤務中、――ですから。はい、これであの、――失礼します。

パム、部屋の出口に向かう。ミーア、それを追いつつ、

ミーア　ごめんなさいね、なんか、お時間取っちゃって、
パム　いえいえ全然、
ミーア　このあとも頑張ってね、配達。
パム　――あの、
ミーア　うん、なに？
パム　や、なんか、

間。

パム　噂があるんだと思います。
ミーア　噂？
ユキ　なに、なんの噂？
パム　や、――その、ユキさんのお店のことについて、あれこれ、
ユキ　まあ、それはね。あることないこと言われてっから。
ミーア　それがハンナと関係あるわけ？
パム　や、だから、ハンナさんも関係してるっていう、むしろ実際お店仕切ってるのはユキさんじゃなくて、ハンナさんだ、――とかっていう。
ユキ　なにそれ？　事実無根もいいところなんだけど、
パム　いや、あたしが言ってるんじゃないですよ、だけど、そういう噂があって、
ユキ　誰が言ってんの？　誰から聞いたの？
パム　それはだから、――噂で、
ユキ　だから噂っていったって実際には誰かから聞くわけでしょ？　誰から聞いたのかって聞いてんの。
ハンナ　（ユキに）いいよもう。（パムに歩み寄りながら）郵便屋さんも帰りな。この調子じゃ仕舞いにゃ拷問されちゃうよ。
パム　ご、拷問？

ハンナ　（パムに対してユキを指し）見て。――まともな人間の目じゃない。
パム　いや、あの、――ご、ごちそうさまでした。
ハンナ　はーい。ごめんねー。

パム、逃げるように退場。

◎作戦会議　その２

間。
ハンナ、コートを羽織る、カバンを持つ、鏡を見る、など出かける支度を始めている。

ユキ　変なタイミングで茶々いれんなよ。
ハンナ　大したこと知らねえよ、あんな末端の配達員が。
ユキ　じゃ、知りたくないのあんたは？
ハンナ　はい？
ユキ　なんで自分が「いちばん悪いやつ」に選ばれちゃったのかって？　なんでそんな、根も葉もない噂が広がってるのかって、知りたくないの？
ハンナ　――知ってどうするの？
ユキ　まずはだって、――納得いかないじゃん、そんな理由もわからずにさ。
ハンナ　うん。で、理由がわかるとなに？
ユキ　誤解があるんだったらそれを解かなきゃ。間違ってますよ、ウソですよ、って。
ハンナ　――無職の犯罪者の言うことを誰が信じるわけ？
ユキ　でも、本当のことなんだし。あたしがダメなんだったらハンナでも、ミーアでも、
ハンナ　全員、犯罪者の家族なんだから。そんであたしは、今年「いちばん悪いやつ」だと思われてる。そんなやつらの言うこと誰が信じるの？

間。

ハンナ　頭冷やしたら？　変な同情してるヒマがあったら自分が消されない方法でも考えな。
あ、そうだ、ばあちゃん、またチョコでも買ってやんなよ。
ヤヨイ　ん？　チョコ？
ハンナ　うん。なんか考え事が捗るんだって、糖分があると。（ユキに）ね？

ユキ、無言。
ハンナ、退場。

◎作戦会議　その３

ユキ　なんなのあいつ。無くない？　あの態度は。
ヤヨイ　いろいろ考えがあんだろう、ハンナにも。
ユキ　なに、考えって。
ヤヨイ　動揺してんだろ。あと数日なんだから、選挙まで。

間。

ヤヨイ　ちょっとはわかってやりな。
ミーア　ユキもそんなさ、――悪く悪く考えなくていいよ。
ユキ　考えてないよ。何が？
ミーア　お店のこと。
ユキ　ああ、――そっちの話か。
ミーア　風紀を乱したとか、ボロ儲けしたとかさ。思ってないから、そんな風に。

一拍。

ミーア　そこそこ頑張ったんじゃない？　元々はそのー、なんだ、誰かさんがやってた店をあたしが引き継いで？　ヒイヒイ言いながらやってたのをあんたがちゃーんと引き継いでくれて、繁盛させてくれて。

間。

ユキ　恥ずかしくなかったの、ミーアは？
ミーア　何も。何が恥ずかしいんだよ？
ユキ　だって、普通のレストランをキャバレーみたく変えちゃったわけだから、
ミーア　ショーを見せてお金をもらうことが恥ずかしいの？
ユキ　いや、その先もあったから。
ミーア　――その先？
ユキ　お酒を出して、ショーを見せて、その先もあったから。って知ってたでしょ、ミーアは。
ミーア　知らないよ。なんにも。

間。

ミーア　そりゃあ、やり方がまずかった、って人もいるんだろうけどさ。みんなが満足してなかったら繁盛なんかしないよ、こういう、どんな噂でもすぐ回っちゃうような町ではさ。
ヤヨイ　儲かりゃなんでもいいってもんじゃないけどね。
ユキ　思ってないよ、そんなこと。

ヤヨイ　わかってるよ、そりゃ。だけど、――お金でやりとりしていい満足とそうじゃないものがあるってことなんじゃないの。
ミーア　いいじゃないですか、お互い、納得してるんですから。
ヤヨイ　当事者同士はそうだろうけどね。
ミーア　ええ。だから、当事者同士がいいんなら、それでいいじゃないですか？
ヤヨイ　それでなんでも済むんだったら、それこそ悪人選挙なんか要らないだろう。
ミーア　だから要らないんですよ、選挙なんて。毎年毎年、町の誰かが消されていって、
ヤヨイ　それを選んだんだ。この町の人間は。
ミーア　私は選んでません。誰が喜ぶんですかこんな、――誰も安心できない、誰のことも信用できない町にして、
ヤヨイ　罪を裁くのはいつも当事者じゃない連中だよ。

一拍。

ヤヨイ　世の中、自分のやってることが本気で気に入らない、なんてやつはいないんだ。いつだって気に入らないのは、どっかの誰かがやってること。――犠牲になる人間が出てはじめて町の平穏が保たれる。そうじゃなきゃ気が済まない、ってのがこの町の人間じゃないか。
ユキ　でも、

一拍。

ユキ　――結構、収穫あったよね、さっきのあの、
ミーア　郵便屋さん？
ユキ　うん。
ヤヨイ　そう、なんかあると思ってたんだよ、あたしは。
ユキ　ね？　絶対おかしいもん。どっかの誰かが、なんかやってんだよ。そうじゃなきゃハンナが「いちばん悪いやつ」になんかなるわけないんだから。
ミーア　地味に暮らしてたからねえ、あの子は。
ユキ　そう。あたしと違ってね。
ヤヨイ　まだやってんのかい、あの、工場。
ミーア　続けてますよ。もう、ずーっと。
ヤヨイ　へえ。
ユキ　酷いとこで働いてるよ。給料がいいってわけでもないのに。
ヤヨイ　物好きだね、ホントに。
ユキ　あんな薄暗い工場でさ、毎日せっせとお肉捌いて。なんでそれが「いちばん悪いやつ」ってことになるんだよ。なんであたしの店の関係者ってことになるんだよ。
ヤヨイ　仕方ないよ。噂には尾ひれがつくもんだ。思い知ったろう、この一年で？
ユキ　そうだけど、――じゃあ、あたしのせいじゃん。

ミーア　――うーん。
ユキ　あたしが選ばれるのだってもちろん納得いかないけどさ、でもこれは、ハンナはだって、本当に全然関係ないんだから、おかしいじゃん！

間。

ユキ　って、こんなことふたりに言ってもしょうがないか。――ごめん。
ミーア　いやいや。
ユキ　ちょっと出てくる。
ミーア　んん？　その格好で？
ヤヨイ　寒いよ、外。
ユキ　――頭冷やしてくる。

ユキ、退場。

◎作戦会議　その４

ミーア　疲れちゃいますね、なんか。
ヤヨイ　あたしはよくやってると思うよ、ミーアさん含め。
ミーア　――はあ。
ヤヨイ　あの子達の親の、（言いかけてマズいと気づき）あー、誰かさんと誰かさんがいなくなってからさ、ホントによくやってくれたと思うもん。親代わりになってくれてさ。
ミーア　そんなことないですけど。
ヤヨイ　いいや。自分が逃げたからよくわかってんだ、あたしは。
ミーア　逃げたなんて思ってないですよ、そんな。
ヤヨイ　でも言ってたよあの子達。「逃げなかったミーアは偉い！　表彰状をあげなくちゃ」って。
ミーア　いるかそんなもん。って、表彰状？　いつの話ですか？
ヤヨイ　うーんとちっちゃい頃ね。
ミーア　そうですか。――へえ。

間。

ミーア　でも、さっきの、あんな噂、どっから出てきたんでしょうね。
ヤヨイ　ああ、ハンナがユキの店を手伝ってたって？
ミーア　ええ。実際なにも関わっていないのに。
ヤヨイ　――知るだけ無駄ってやつじゃないの。と、思うよ、あたしは。
ミーア　どうせ信じてもらえないからですか？　あたしたちが何を言ったって、

ヤヨイ　まあ、それもあるし、
ミーア　はい。

間。

ヤヨイ　私はミステリー小説が好きでさ。
ミーア　ミステリー？
ヤヨイ　犯人探しにも基本の考え方ってのがあるわけよ。
ミーア　はあ。基本の――。
ヤヨイ　その犯罪によって最も利益を得る人間をまず疑えって。

間。

ミーア　ユキを疑ってるんですか？
ヤヨイ　違うよ。
ミーア　ユキがそういう、ウソの噂を広めたって？　違いますよそんな、――そりゃあいつはどうしようもないやつですけど、そんなことする子じゃありませんよ、
ヤヨイ　言ってないだろう、そんなこと。
ミーア　でも疑ってる／そう、思ってるってことじゃないですか？
ヤヨイ　思ってない・思ってないよ。
ミーア　信じらんない。なんてこと言うんですか、この、ガリチョコ君。いやさ、――スリム、スリム・チョコ・ばばあ！
ヤヨイ　思ってないって言ってるだろう。疑ってなんかいないよ、ユキのことは。
ミーア　――じゃあ、誰を疑っているんですか？
ヤヨイ　知らないよ。ユキをいちばん、失いたくないと思っている人間じゃないか。
ミーア　――って、え？　あたし？　私じゃないですよそんな、
ヤヨイ　そうじゃなくて、もう、どうにも早とちりだね、ミーアさんは。
ミーア　ヤヨイさんがそんな、ぼやかした話し方するから。

間。

ヤヨイ　わかるだろう？　よーく考えてみりゃ。

場面転換。

【4】　管理委員会

◎委員会　その3／写真を捨てる

ロア、スー、サリ、苅谷、エリカ、がいる。

ロア　それでは最終打ち合わせを始めることにいたしましょう。どうぞよろしくお願いします。

委員たち　よろしくお願いします。

ロア　なお、今回の討議はすべての会話内容について厳格な守秘義務が発生いたします。各人、そのあたりに関してはもう一度ご確認ください。

委員たち　はい。

ロア　まず冒頭、私の方からいくつかご報告があります。

ロアの学生時代の回想。ロア、リオ、アンかいる。

ロア　なんか別れたらすぐつきあってた頃の写真とか捨てる人いるでしょ？

リオ　いるいる。

アン　というかあたしだ。絶対捨てる。

ロア　えー、ホンキで？

アン　だって思い出したってしょうがないじゃん。

リオ　え、もうホント・スパっと？

アン　まあ、割と。

ロア　え、なにもかも？

アン　そうね。なんかひとしきりバラードとか聞いて、

リオ　［なんだよそれ（笑）

ロア　［バラード（笑）

アン　儀式・儀式。

委員会の場に戻る。

ロア　ご案内の通り、――悪人選挙は投票日に即日開票いたしまして、当選者には結果発表から二十四時間以内での出頭義務が生じます。――とはいえ、自主的に出頭してくださる方はおりませんので制限時間を過ぎたのちに強制出頭、――要するに逮捕による身柄拘束、そのあとは管理局の仕事に移りまして、当選者の方には消えていただく、と、そういう流れになっております。さて――。

アン　それでまあ、ひとしきり泣いたな、って思ったら捨てる。

リオ　え、写真とか手紙とかも、全部？
アン　ま、金目のもの以外は。
リオ　ちょっとちょっと（笑）
ロア　えー、すごいね。ホンキで？
アン　ホンキ・ホンキ。だっていつまで取っといたってしょうがないじゃん。
リオ　え、どうしてバラードを聞くの？
アン　なんか、――哀しみ？
ロア　ふざけんなよ。
アン　いや、それはそれであるじゃん。泣けるんだ一緒に唄ってると。

ロア　先日の予備投票の結果、現時点でのランキング一位はハンナさん、という方になっております。大方の予想では、今年は彼女の姉であるユキさん、この方が当選すると思われておりましたが終盤で一気に逆転、ハンナさんがトップに躍り出た、という訳です。

リオ　むしろあれじゃない？　アンの場合こう、バラードを唄うことメインで考えてて＝
ロア　はいはい。
リオ　＝もう、なに？　いい感じでバラードを唄うために恋愛がある、みたいな？
ロア　それだ。
アン　違うよ別に。それはなんか儀式として。
リオ　え・え、ロアは捨てないんだ？
ロア　捨てないし、なんか捨てられてるのってヤじゃない、相手に？
リオ　あー。
アン　相手には取っておいてほしいよね。
リオ　（アンに）ホント勝手。
ロア　なんかさあ、なかったことにしてんじゃねえぞ、って感じして。なに勝手にさっぱりしてんの、って。
アン　じゃあ、捨てないよ。ロアと付き合うことが仮にあったとしたら。
リオ　おおー。
ロア　というか、別れる前提で付き合うなよ。

ロア　当然ながら今年は緊張感のある選挙が予想されるわけですが、――そんな中、大変残念なことなんですが、前回の委員会のあとでいくつか不正疑いの報告があがって参りました。もちろん、その不正が正式に認定されますとその方が、――明日の本投票の結果いかんに関わらず、その方が今年の「いちばん悪いやつ」に選出されることとなります。――えー、少々ややこしいお話なんですが、その不正疑いをかけられている方というのが、――現在ランキングトップのこの、ハンナさん、ということになります。

リオ　そんなこと言ってたらロアに嫌われるよ。

アン　ウソ・ごめん。
ロア　嫌わないよ。
リオ　ロアは怖いよー。町長の娘だからね。
ロア　は？　関係ないでしょ？
リオ　あるじゃん全然。
ロア　どこが、
リオ　だって町長が本気出したら誰かを消すぐらい簡単なことじゃん。
ロア　しないよ、そんなこと。
リオ　町の片隅にいってスープを配ってさ、配給でーす、なんつって？　そしたらカタスミの連中なんか一発じゃん。
アン　バカにしすぎだから。
リオ　それでその配給の時にさ、「アンはあんまりいい子じゃないなあ。いい子になってほしいなあ」――とかいってりゃさ、
アン　ああ、みんなが慮って？
リオ　そう、慮って。

アン、リオ、退場。

ロア　なにそれ。

ロア　本日、みなさんに話し合っていただくのは、この不正疑惑についての判定です。選挙当日には身柄拘束というスピード感を持った運営を実現していくためには、当日にあまり詳しい議論をしている時間がございません。したがって、本日の討議であらかたの結論を出しておいて、当日の委員会はあくまで補足程度、つまり、――不正疑惑への対応については本日出た結論をもって実質的な最終結論を出す形になるかと思います。――どうぞみなさん、そのつもりでいらしてください。それでは、各自配布されている資料をご覧ください――

◎委員長の憂鬱　その2／パム・アン／パム・ハンナ

アン　ちょっとロアの耳に入れておきたいことがあるだけどさあ、
ロア　なになに？
アン　んー、ちょっと言うかどうか悩んだんだけど、
ロア　うん。
アン　選挙についての話なんだけどね、ちょっとイヤな噂を聞いて、というか、まあ、噂ってレベルの話じゃないんだけど、
ロア　なに、不正の話？
アン　そう。うちのあのー、パムちゃんに聞いた話なんだけどね。結構ヤバい感じがして、
ロン　うん。聞かせて、詳しく。

パム、登場。パムがアンに相談している場面になる。
パムはどら焼きの空き袋を持っている。

パム　こないだあの、カタスミに配達に行った時の話なんですけどね、
アン　ああ、ごめんね、ずっとあなたのエリアにしてて。あたし、どうも苦手でさあ、
パム　いいんですけどねそれは。慣れましたんで。あそこにちょっとあの、悪い双子がいるじゃないですか？
アン　悪い双子。
パム　あの、妹の、帽子かぶっている方に捕まって、少し話をしたんですけど、

ハンナ、登場。その時の場面になる。

ハンナ　いやいやいつもご苦労様ですね、郵便屋さん。
パム　いや、まあ、仕事ですから。
ハンナ　ところであのー、投票を誰にするかっていうのは、もう決めました？
パム　いや、まだなんにも。
ハンナ　いつも困りますよねえ。誰に投票しても罪悪感が残る——。
パム　そうなんですよね、あれって。
ハンナ　かといって投票をサボッたらそれはそれで「悪い」ことだと言われる。サボッた人間が貼り出されるんだからみんな、明日は我が身ですよ。
パム　ホントに！　だからもう、困っちゃって。
ハンナ　ですよねえ。そこでちょっとご相談なんですけどね、——もし仮に？　郵便屋さんが全然罪悪感を感じないで済む方法があるんなら、——知りたくないですか？　興味ないですか？
パム　そりゃ、そんな方法があるんなら伺いたいですけど、
ハンナ　考えたんですよ、あたし、
パム　はい。なんでしょう？
ハンナ　簡単なことです。——正義のために投票をすればいいんです。
パム　正義のために？
ハンナ　言い換えれば私をね、いちばん悪いやつに選んで欲しいんですよ。
パム　ハンナさんを？　どうして？
ハンナ　今、事前予測で誰がいちばんになっているかはご存知ですよね？
パム　ええ、ユキさんが、——あ。

一拍。

パム　助けるってことですか？　お姉さんを？

ユキ　でも、姉には今、いろんな悪い噂があるでしょう？
パム　ああ、なんかお店のこととかでちょっとあたしも聞いてますけど、
ユキ　あのお店、実は影で操っていたのは私なんですよ。
パム　ええ？
ユキ　というね、そういうビラを撒いて欲しいんです。郵便物と一緒にコソッと。

間。

パム　ご家族を思う気持ちはそりゃ、立派なことだなあ、とは思いますけど。
ユキ　こんなこと、他の人には頼めないですから。
パム　でも、――いいんですかそれで？　ハンナさんは？
ユキ　覚悟が無くて言えます？　こんなこと。

間。

パム　なるほど――。正義のため。
ハンナ　――とりあえずこれ、もう刷ってありますんで、

ハンナ、チラシ束を渡し、

パム　いや、困ります。まだ私、そんな協力できるかどうかわかりませんし、
ハンナ　いいんですいいんです。できる範囲で構いませんし、巻き込まないようにしますから。あくまで、あくまで気が向いたら、っていうことで、
パム　でも、
ハンナ　まあ、ビラなんて自分で撒けよって話なんですけどね。大丈夫、郵便屋さんが不正行為に問われるようなことにはしませんから。私が全部責任を持ちます。だから、――ね？　受け取るだけ。

ビラを押し付けるようにして受け取らせ、ハンナ、退場。

アン　あんたそういう話をされたらその時点で断らないと、
パム　でもホントロがうまいんですよ！　ついつい口車に乗せられちゃって、
アン　そんでなに？　配っちゃったわけ、そのビラ？
パム　――少しだけ。

一拍。

アン　もうね、呆れてものが言えないというか、なんだろう、この素直すぎる罪――。

パム　よく言われます。素直すぎる、正直すぎるって、
アン　バカなのよ。
パム　ええ／ちょっ／ええー、
アン　そんでなに？　もう全部話しちゃいなさいよ、なんかあたしが、うまいことあんたが悪くなんないようにこう、話してあげるから。
パム　アンさーん（ありがとうございます）。
アン　誰にも言っちゃダメよ、ビラ撒きのことは。あたしも誰にも絶対言わないから。
パム　わかりました。言いません、絶対。
アン　あんたも共犯にされちゃうんだからね？　自分の身は自分で守らないと。
パム　そうなんですよ！　まさに共犯にされそうになっちゃってまして、いま。
アン　いま？　まだなんかあるの？
パム　はい。あのあと、予備投票が終わったあとで勤務中に捕まっちゃいまして、
アン　な、なに、どういうこと？
パム　いやなんか、お家に案内されてミルクティーをご馳走になって。
アン　ダメでしょ、そういうことしたら、
パム　いや、無理矢理ですよ！　ホント。でもまあ、その場はなんとかなったんですけど、問題はその、お家を出たあとで、
アン　お家を出たあと？

ハンナ、登場。ハンナは「作戦会議　その４」の最後で羽織ったコートを着ている。

ハンナ　郵便屋さん！
パム　ああ、ハンナさん。
ハンナ　良かった。追いついて。
パム　どうかしたんですか？
ハンナ　いろいろね。郵便屋さんのお陰で助かってますよ。
パム　そんなそんな。
ハンナ　大変なことといろいろ押し付けちゃって。お陰様でなんとか目的が達成できそうです。
パム　良かったです。お力になれたんなら。
ハンナ　今日のはちょっとヒヤッとしましたけどね。ユキの前であんな話始めるから。
パム　ああ、なんかすみませんでした、余計なことを。
ハンナ　（明るく）ホォント余計です。ああいうことは。

間。

パム　すみませんでした。
ハンナ　うん。取り返しのつかないこともあるからちゃんと考えて。というね、それだけ。

ハンナ、立ち去る。
パム、それを呼び止めて。

パム　でもあたし、――何にも知らないのはあんまりだと思うんです。

ハンナ、立ち止まって、

ハンナ　――あんまり？
パム　だって、ハンナさんはユキさんのために一肌脱いでる、っていうか、むしろ濡れ衣を着てくれているわけじゃないですか？
ハンナ　脱いだり着たり大変だ。
パム　そういうのを全部、ユキさんが何も知らないでいるっていうのは、――それじゃハンナさんがあんまり報われないじゃないですか。
ハンナ　――（パムを見ずに）なるほど。使えねえな。
パム　はい？

間。

ハンナ　それじゃ、ちょっと郵便屋さんをがっかりさせちゃうかもしれないんですけどね。プランBてとこですかね。
パム　プランB？
ハンナ　確かに郵便屋さんの言う通りでね。やっぱりあたしもいざ自分が選ばれてみるとね、――怖くって。
パム　ああ。
ハンナ　だって、ねえ？　消された人間がどうなるかなんて誰にもわかんないわけですし、どうされちゃうか考えてたら、もう、――ねえ？
パム　ええ、ええ。そうですよね。
ハンナ　だからやっぱり、――本当にいちばん悪いやつが選ばれるべきなんじゃないかって思い直して。だって、善良な人が間違えで消されちゃうなんて悲惨でしょ？
パム　ま、まあそうですけど、え、でもそれって、
ハンナ　だからやっぱり事前予測でぶっちぎりの一位だった女、――やっぱり、あの女が選ばれるべきなんじゃないかって。
パム　いや、ちょっとなんですか？　だって、いやいや、それじゃだって、こないだと全然、――真逆の話じゃないですか？
ハンナ　だから言ってるじゃん、プランBだって。全然、真逆の考えになったんで。
パム　ええ――。
ハンナ　だからもう、あたしの噂を広めてもらう必要も無いし、ビラ撒きとか、ああいう不正行為は郵便屋さんも止めて欲しいなって。

パム　不正行為って、別にそんな、――不正に協力したつもりは無いですよ、私は、
ハンナ　なにいってんの、もう共犯でしょ？
パム　だって、ええ？　責任はハンナさんが持つって言ったじゃないですか？
ハンナ　そうだっけ？　え、でもじゃあ、それで協力してくれたんだよね？　不正行為に。
パム　そうじゃないですって。だって、私は巻き込まないって、そういう風に、ハンナさんがいったんじゃないですか？
ハンナ　へー？　巻き込まないよ、って言われたら協力して良いんだ？　不正行為に？
パム　そんな――。
ハンナ　考えてみてよ。もしもさ、――もしも私が郵便屋さんのやったことを全部みんなにしゃべったら、どう？　――私じゃなくてもいっか。誰か別の、――みんなに信頼されているような人に私が告げ口をして、その人が郵便屋さんの実際にやった罪を告発したら、
パム　★やめてください！

間。

パム　――どうしろっていうんですか？
ハンナ　簡単なこと。やっぱり私が助かるようにしてください、っていうね。そう、今度は真逆のお願い。
パム　じゃあ、そういうなんか、また別のビラを撒くってことですか？
ハンナ　ああ、いいアイディアだ。そうしよっか？　「ハンナはやっぱり無関係！　風紀を乱してボロ儲けしたのはユキひとり！　ユキが悪い！　いちばん悪いのはユキ！」そういうビラを＝
パム　＝お断りします。そんなの、――全然協力できません。
ハンナ　でも、それが本当のことですよ？
パム　本当かどうかなんて知りませんけど、でも、
ハンナ　おかしくない？　ウソのビラ撒きには協力してくれたのに真実を伝えようってときには断るなんて、
パム　言ってることがどんどん変わるじゃないですか、なんか、もう付き合い切れませんよ。関わりたくないんです。
ハンナ　じゃあ、――あとは競争だね。あたしと、郵便屋さんと。
パム　だからあたしは競争なんかしません。関わりません。
ハンナ　ああ、違う違う。宣伝の競争じゃないよ？　全然そんなことじゃなくて、
パム　なんですか、じゃあ？
ハンナ　密告する競争。不正行為をやった人間がいるぞ、って。ちょうどいいや、郵便屋さんの上司、あのー、アンさんでしたっけ？　あの人は町長の娘さん、というか、選管のロアさんのパートナーだったよね？
パム　――じゃあ、あの、え？　アンさんに言うんですか？
ハンナ　（惚けて）んー、何を？

パム　だから私が、

一拍。

ハンナ　言いますよ数日中には必ず。なんか、すみませんでしたねえ。――巻き込んじゃって。

一拍。

ハンナ　もちろん郵便屋さんが誰にも言わないよ、私に協力してくれるよ、っていうんなら私も誰にもいいませんけど。

パム　し、信じられませんよ、もう、そんな、（どら焼きを渡され）って、え・え？　なんですかこれ？

ハンナ　いや、いつもがんばっている郵便屋さんに、ほんのお礼のどら焼きですよ。

パム　どら焼き、

ハンナ、退場。

▲パム　ダメ、ダメです、こんなどら焼きなんて、――どら焼きなんてダメです！

パム、ハンナを追って退場。

アン　これって完全に不正だよね？

ロア　そうだねえ。まあ、間違いなく――。

アン　噂には聞いてたけどどうしようもないね、ハンナって。まさか自分のお姉さんを売るなんてさあ、

ロア　うん、そう、だねえ。

アン　ねえ？

ロア　★いや、だけど、――その話だとパムちゃんも不正行為に加担してしまってるわけだよね？

アン　や、違うでしょ、あの子は単に素直すぎたっていうだけで、

ロア　でも、ビラ撒きは実際に手伝ったわけでしょう？

アン　――いや、だから、厳密に言えばね。でも、誰が本当に悪いのかは考えるまでもないわけじゃん。

ロア　まあまあ、パムちゃんの言ってることだけを信じるなら、ね。

アン　ウソとかじゃないって。ロアも知ってるでしょ？　そりゃ今回のことは確かにパムが悪いし、普段からあいつはミスばっか言い訳ばっかのやつだけどさ、でも、――こんな世の中なんだからさあ。せめて自分に近しい人間だけは守らなきゃ。

ロア　いや、違うよ。自分に近しいかどうか、とかじゃなくて――。そんなの関係ないよ。守らなきゃいけないのは人じゃなくて、ルールなんだから。
アン　でも、――選挙で消されるのは年に一人っていうルールでしょ？
ロア　そうねえ、
アン　だったら、――ねえ？　パムのこと伏せていたって結果は同じなんだし、あの子のことはいったん忘れてさ、／悪気は無いんだから絶対。だって、じゃあロアはさ、例えばカナが同じ立場になっても守ってあげないの？　守るでしょ？　確かにルールだけどさ、違うじゃん、そういうのは。

一拍。

ロア　結果は、変わらないだろうからね、確かに。
アン　でしょ？　だから、ね。お願い。今回だけはパムの素直さに免じてさ。委員会でもあいつのことは伏せておいてやってよ。
ロア　★いやいやいや！　止めて止めて。委員会のことにまで口出さないで。それはさすがに、
アン　――ごめん。
ロア　あとはあたしが、判断するから。

アン、退場。

◎委員会　その４

ロア、スー、サリ、苅谷、エリカ、がいる。

ロア　では、何かご質問などございますでしょうか？

一拍。

サリ　あの、よろしいでしょうか？
ロア　どうぞ。
サリ　この、あのー、ハンナさんの不正内容に関してなんですけど、
ロア　ええ、ええ。
サリ　言葉が難しくてよくわからなかったんですけど、キョウソ、っていうのは、
ロア　教唆。
サリ　あ――（周囲を見回したのち）教唆っていうのはこれは、要するにその、みんながユキさんに投票するようにそのー、裏工作？　みたいなことをした、という解釈でよろしいんでしょうか？

ロア　そう理解していただいて結構です。
サリ　ユキに投票してねー、というお願いをして回ったということですよね？
ロア　まあ、「して回った」かどうかはわかりませんが、――そうですね、お願いを超えてどら焼き／買収的な行為、脅迫的な行為もあった、と疑われています。
サリ　あ、そうか、そうなんですか。
ロア　ええ、そう書いてあります。
サリ　（慌てて資料を見て）あ、すみません、ありましたっけ、そんなの――。
ロア　いや、どら焼きは無いですけど。んー、他になにか？

一拍。

スー　なんかあのー、ヘンな確認になっちゃうんですけど、
ロア　はい。どうぞ、
スー　要するにその、自分のお姉さんが当選するように、妹のハンナさんが手を回した、ってことなんですよね？　そんなことってあるんでしょうか？
ロア　――まあ、実際にそう報告があがっていますので、
スー　うーん。仮にもユキさんの妹でしょ？　そんな気合の入らないことすんのかなあ。
ロア　よくあることですよ。親族に対する暴力的な活動というのは、――まあ、そうですね、あんまりいいことではないのかもしれませんが、よくある話です。
スー　なあんか納得いかないんだよなあ。
エリカ　じゃあ、あの、あ、これも確認みたくなっちゃうんですけど、
ロア　はい、どうぞ。
エリカ　ハンナ、さんはその、ユキさんが悪い人に選ばれるように裏工作をして、その不正事実によって、今回の「いちばん悪いやつ」に選ばれる、ということですよね？
ロア　報告書ではそうなっていますね。
エリカ　これってでも、結果としてお姉さんを守った、――ということにもなるわけですよね、ハンナさんは？
スー　ああ、まだその方が納得できるかなあ。
ロア　（あなたは）エリカさん？
エリカ　あ、はい。エリカです。
ロア　あなたにはハンナさんがユキさんを守ったように見える、と、そうおっしゃるわけですよね？
エリカ　はい。そう見えます、私には。
ロア　当然、そうなるとハンナさんは悪い人ではない、ということにもなりそうな話ですが、――ところで、何か具体的な根拠があっておっしゃっているんですか？
エリカ　具体、的な根拠――
ロア　ええ。

間。

エリカ　――は、何もありません。
ロア　そうですか。――わかりました。
エリカ　★でも、そうだったかもしれませんよね？
ロア　報告書のどこかにそういう記載がありますか？　すみません、私は見つからなかったんですが、
エリカ　★いや、報告書にはなにも載ってないんですけど、――でも、そういう可能性について考えることはできるじゃないですか？
ロア　もちろん、できます。ですが、――ここは可能性について論じる場所ではありません。あくまで報告書に基づいて、適正な判断をくだしていただくための場所です。
スー　そうかもしれないですけど――。
エリカ　でも、――報告の中に見落としがあったら？
スー　ねえ？
ロア　報告書に誤りがあった場合には、その報告をあげた方の責任、ということになります。ここでは、あくまでも報告書が正しかったという前提に立って議論を進めていただき、判断をくだしていただきたい。――よろしいですか？
エリカ　――はい。
苅谷　あの、――買収的な行為があった、と、報告書にあるんですが、
ロア　ええ、ありますね。
苅谷　それじゃ、実際に買収されて裏工作に協力した方がいる、ということでしょうか？

間。

ロア　知りません。というのも、協力者については何も書かれていませんから。
苅谷　調査委員はその点について調べなかったんでしょうか？
ロア　調べた結果として、協力者と断定できる人物には辿り着けなかった。――そういう報告書だと私は理解しています。

苅谷、ロア、しばし見つめ合う。

苅谷　でしたら特に意義はありません。私は、この決定で、よいと思います。
ロア　どうもありがとう。

一拍。

ロア　では、他に何か？

ロア、退場。続いて、委員会の人々も退場。
場面転換。

◎委員会　その５

スー　ふー。おつかれー。
サリ　おつかれさまでーす。
スー　やあ、やっぱロア様の圧力ハンパ無いよね。
サリ　ホント、もう私なんかビビっちゃって、格が違いますよ。
スー　でもがんばってたじゃん？　最初に手挙げるから、おおっ、って思って。
サリ　いや、みなさんの意見が出たあとだと何も言うことなくなるかなって。
スー　偉い偉い。発言しようとすることが大事だからね、まず。
サリ　はい。いや、こないだエリカさんにもいろいろ言っていただいたから。
エリカ　え？　なんか言った？
サリ　はい。なんかそれで勇気出たっていうか。まあ、私なんて何もできないですけど、
エリカ　何もできないのはあたしだよ。何も。
サリ　そんなことないですよ！
スー　そうだよ。ちゃんと意見言って、というか何か反論みたいなこともしてたじゃん？
エリカ　結果は何も変わらなかったけどね。
スー　いやいや、こういうのはプロセスが大事だから。それに、なんだかんだでユキさんにな
　んないって決まったようなもんだし。
サリ　ですよね！　良かったですそれはホント。
スー　もっとも、――委員が結果に関してあーだこーだ言うべきじゃないとは思うんだけど
　さ、
サリ　すごい。スーさんベテランオーラ出しまくりじゃないですか。
スー　まあまあ、二年目目なんだけどね、たかだか、
サリ　いやいや、二年目でそれなんだからすごいですよ。
エリカ　もうやめよう、そういうの。

一拍。

サリ　すみません。
スー　え、そういうのって？
エリカ　なんか、何もできなかったのに何かできたみたいな感じで言うの。
サリ　あ、そうですよね、私がなんか調子に乗っちゃったから、すみません。
スー　いやいや、サリは悪くないでしょ、今のは！
サリ　いや、でも、あたしですよね？
エリカ　いい、いい、そういうのいいよもう。ごめんなんか、あたしも一緒なのにね。

サリ　いやいや、そんな、エリカさんとは全然違いますよ。一緒だなんてそんな、

一拍。

エリカ　――楽だよね、そういうスタンス。
サリ　え？　スタンス？
エリカ　自分がいちばんできません、自分がいちばんダメなやつです、自分がいちばん弱いです、自分がいちばん困ってます、自分がいちばん＝
スー　＝ちょっとエリカ！
エリカ　ごめんごめんごめん、なんかあたし余裕なくて。

一拍。

エリカ　こんなんだから友達できないんだな。
スー　え？
エリカ　ごめん帰るね。
スー　あ、そうなの？　え、え、連絡先だけでも交換しない？　たまには会ってご飯でも食べようよ。
サリ　そう、ですね。これも縁ですし。
エリカ　いいやあたしは。

一拍。

エリカ　来年また会おう。それで十分じゃん。
スー　いや、そうだけどさ、せっかくなんか気が合いそうだったから、
エリカ　うん、でも、あれでしょ？　あのー、ねえ。
スー　なに？
エリカ　委員は仲良くするものじゃないから。

サリ、スー、退場。

◎デザイン姉妹　その２

リオ、エリカがいる。

リオ　どうだったの、委員会？
エリカ　――え？
リオ　いや、どうだったの？

エリカ　どうって、何が？
リオ　いや、別に普通に聞いただけなんだけどさ、
エリカ　まあ、普通だったよ。
リオ　ふーん。

一拍。

エリカ　ユキとハンナのこと？
リオ　ん、そうそう。それも気になるし。
エリカ　お姉ちゃんに聞かれてそれでペラペラしゃべってたらあたし委員失格じゃん。
リオ　まあ、そっか。
エリカ　うん。そう。
リオ　だから別に聞いてないじゃない、ふたりのことは。ただ、今日はどうだったのかなあ、って、そういう、普通の会話？　そっちの事情もわかるしさ。
エリカ　わかんないよ＝
リオ　え？
エリカ　＝お姉ちゃんにはこっちの事情なんてわかんない。委員会のメンバーでもないんだから。

一拍。

リオ　なんでそうやって、いちいちつっかかってくるのよ。
エリカ　そう？　ごめんね、そういうつもりはないんだけど。
リオ　ホラ、それでそうやってすぐ思ってもないくせに謝る。
エリカ　謝らなきゃ謝らないで怒るくせに。
リオ　そんなことないよ。
エリカ　あるよ、絶対。

一拍。

リオ　まあ、ユキとハンナのことはひとまず置いといてさ、なんで／うーん。何か怒ってる？
エリカ　あたしが？　お姉ちゃんに？
リオ　そう。
エリカ　ないよ。ない。何も怒ってない。
リオ　でも、怒ってる感じじゃない？
エリカ　違う人間だから。お姉ちゃんとあたしは違う人間だから。それだけ。
リオ　――なにそれ。

エリカ　話し合ったってわかんないことはわかんないよ。なんでもかんでも話せばわかるってもんじゃないでしょ。
リオ　だからってそうやって何も言わずに怒られててもさあ、
エリカ　だから怒ってないって。

一拍。

エリカ　怒ってないの。本当に。確かにあたしの態度が悪いとは思うよ。ごめんね。これは本当にごめん。
リオ　じゃあ、なんでそんな――
エリカ　なに？

一拍。

エリカ、リオに話しかけようとして何か身振りをしている、

リオ　なに？
エリカ　距離感のさあ、こう、デザインの仕方が違うんだよ、全然。
リオ　どういうこと？
エリカ　お姉ちゃんは結構なんでもさ、いろいろあけすけに言うし、オープンな感じだし、でも言いたくないことだってあるでしょ？　人のことなんだからさ、わかんないことだってあるでしょ？
リオ　そうだねえ。
エリカ　「うん。わかるわかる。うんうん」

一拍。

エリカ　お姉ちゃんはいつもそういう感じじゃん？　わかるわかる、みたいな？　あたしはわかんない、って思って暮らしているから。
リオ　家族なのに？
エリカ　家族ならわかるの？　違うでしょ。というか、そこだよ多分。
リオ　うん――。
エリカ　なんか、なんかお姉ちゃんは昔っからこうした方がいい、とかさ、こうなったほうがいい、とかさ、そういうのがあるじゃん。理想の形っていうか。
リオ　そりゃあるでしょ、誰だって。
エリカ　みんな共通のものがあるわけじゃないから。
リオ　うーん。押し付けるなってこと？
エリカ　まあ、そうとまではいわないけど、でも、まあ、そういうこと。

間。

リオ　なんか久しぶりにこんなにエリカとしゃべったね。

エリカ　そう？　まあ、そうかもね。

リオ　ありがとね。なんだかんだいってエリカは優しいからさ、嫌でも、ぶつけられたらつきあってくれちゃうからね。それでちょっと疲れさせちゃってたのかね。

一拍。

リオ　まあ、今までずっとそうだったのかあ、って思ったらそれはそれで寂しいけど、でも、まあ、今わかってよかったよ。

間。

エリカ　予備投票のまんま行くんじゃないかな。たぶん。

リオ　ああ、選挙？

エリカ　なんか、まあ、純粋な投票の結果でいったらホント僅差で、どっちになるかわかんないぐらいなんだけど。

リオ　★なのにハンナちゃんがいちばん悪いやつになっちゃうの？　どうして？　って、ああ、いや――。言わなくていいんだけど、そうなんだ――。

間。

リオ　まあ、あれだよね、だから。

一拍。

リオ　不正があった場合とかは投票の結果に関わらず、そのまんま決まることもあるよね。

エリカ　（リオを見ずに）そうだね。一般論として。

リオ　一般論として。

間。

リオ　そっか――。あれだねだから、ハンナがユキを守るためにその、別の誰かがいちばん悪いやつになるように仕組んだ、とか、そういうことがもしまあ、仮にあったとしたら、ね。

エリカ　そうだね。仮にそうだったとしたら、不正だね。

リオ　うん。そうか。あー。そうか、そうなんだ。

間。

エリカ　まあ、実際はその逆なんだけどね。
リオ　逆？　逆ってなにが？
エリカ　――
リオ　あー、ユキが、ハンナを守ろうとしたってこと？
エリカ　やあ、そうじゃなくて、
リオ　そんなわけないか――。え、じゃあ、逆って――、え？　守ろうとしたわけじゃない、ってこと？　ハンナがユキちゃんを貶めようとしたっていう＝
エリカ　＝もうやめよ、この話。ね。お願い。

間。

リオ　わかった。ごめんね。結局なんかいろいろ言わせちゃって。
エリカ　ううん。別にあたしが勝手にしゃべっただけだから、それにまあ、
リオ　うん。
エリカ　一般論と仮定の話しかしてないでしょ？

間。

リオ　そうだね。

場面転換。

◎委員長の憂鬱　その３

ロア、アンが登場して新しい場を設定する。
このシーンは携帯電話と明示はしないが、通信端末でのやりとりを想定すること。
※したがって電話のマイム、小道具等はいらない。

ロア　今、ちょっといい？
アン　うん。いいよ。どうかした？
ロア　選挙のことなんだけど。
アン　あれ、珍しい。あ、今日委員会だったっけ？　お疲れさまー。
ロア　ありがとう。
アン　こっちはカナの運動会で一日潰れちゃったよ。
ロア　ああ、そうなんだ。
アン　でも聞いて！　一等賞たったんだよ、かけっこ。

ロア　ああ、そう。――すごいじゃない！
アン　でしょ？　カッコ良くてちょっともう涙出ちゃったもんなんか、
ロア　なんでよ。
アン　いや、泣けるんだよ、運動会は。玉入れとかもう、
ロア　玉入れ？　なんで？
アン　え、なんか、あんなもんいくつ入ってどうってことないのにさ、一生懸命やるから。一個でも玉を多く入れようと思って必死になるからさ、なんか、もう、
ロア　わかったわかった。
ロア　そう、じゃあ、今日はちょっとお母さんもお疲れね。
アン　ねー。なんだかんだで一日仕事だから、――って、あれ？　ごめんなんかこっちの話ばっかして。それで？
ロア　ああ、いや、大したことじゃないんだけどね。
アン　うん、なに？
ロア　これでよかったのかな、って。
アン　え？　ああ、あたしがいったやつね？　あの、双子の？
ロア　そうそう。ユキとハンナのことなんだけど。
アン　うん。え、これでよかった、って？
ロア　ああ、いや、もしもさ、もしもハンナがね、
アン　うん。
ロア　こっちに全部バレるってことまで、――だからパムちゃんがアンに泣きついて、それを私に伝えて、っていう、結果としてハンナに罪を押し付けることまで全部計算してたとしたら、さ。――違うな、だから。ハンナがお姉さんを守ろうとしたんだとしたら、さ。それって――悪いことなのかな。

一拍。

アン　委員会でそういう話が出たの？
ロア　ああ、いや――。
アン　って、そこまでは言えないか。
ロア　ごめん。

間。

アン　考えすぎでしょ。
ロア　まあ、そう、なのかな。
アン　それってだって、ユキを消そうとする裏工作をして、そのことで逆にユキを助けるっていうことでしょ？　そんなことまで考えないって。

ロア　まあ、でも、バレないと思って行動してるにしては、ちょっとヘンだなって思うことも
あって、そもそもアンと私が家族だってわかってるのに、その部下に不正を持ちかけたってい
うのもさ、
アン　まあ、ねえ。責任が重い仕事だからね。
ロア　――んん？
アン　ロアは本当にえらいよ、いつも。仕事なんだから割り切ってやればいいのに、いちいち
選ばれるやつのことまで考えて。
ロア　考えてないよ。［あたしは、
アン　［考えてるって。ホント。そういうとこって見習いたい。

一拍。

アン　まあ、大丈夫だよ、きっと。
ロア　そうかな？
アン　うん。だって、もしも本当にお姉さんを守ろうとしていたんだとしたらさ、
ロア　うん。
アン　この結果はハンナの望み通りでしょ？
ロア　――そっか。
アン　うん。
ロア　なんか、疲れてるのにごめんね。
アン　いやいや、そんじゃ今日はお家でゆっくりしよーねー。
ロア　うん。またあとで。
アン　はーい。

アン、退場。
ロア、少し一人の時間があって、退場。※ここで椅子が履ける？

【5】　その日

◎はんぶんこ

ユキ　いよいよだね。
ハンナ　うん。――いよいよ。

間。

ユキ　どっちが選ばれるにせよ、マジでクソみてえな結末だよ。
ハンナ　――あんたは選ばれないけどね。
ユキ　なんでよ？　わかんないだろ。
ハンナ　わかってんでしょ？　予備投票の一位はそう簡単に変わらないから。

間。

ユキ　まあ、どうせ近いうちあたしもそっちに行くからさ。
ハンナ　そっちってどっちだよ（笑）
ユキ　や、だから、
ハンナ　消されるんだからどっちもクソもないでしょ。
ユキ　――そうか。

間。

ユキ　話すことないね。
ハンナ　フフ。いいよ、無理に絞り出さないで。

間

ハンナ　ふたりで生まれてきてよかったって思う？
ユキ　思うわけないじゃん。
ハンナ　だよねー。

間。

ユキ　誕生日でもなんでもいつも主役ははんぶんこだし。プレゼントもはんぶんこ、食事もはんぶんこ、友達も、愛情も、もらえるものは何でもはんぶんこ。
ハンナ　あんたさえいなければ、ってね。

ユキ　性格の悪さもはんぶんこだったらよかったのに。

一拍。

ハンナ　「え、お二人はいつからのお知り合いなんですかー？」
ユキ　「ああ、はい。子宮からー」
ハンナ　持ちネタもはんぶんこだ。

ふたり、笑う。

ハンナ　まあ、消されたやつがどこに行くかは知らないけどさ。仮に？　どっかそういう、行くとこがあるとしてさ、
ユキ　うん。――あるとして？
ハンナ　なるべくこっちには遅く来いよな。はじめての一人を存分に満喫してやんだからさ。
ユキ　安心しろ。愛されてっからな、あたしは。
ハンナ　どこがよ？　憎まれ切ってんだろ。
ユキ　当分一位にゃならないよ。なんか、――そんな気がする。
ハンナ　フフ。よく言うよ、暫定一位さんが。来年来るんじゃねえの？
ユキ　まあ、神様に愛されてると思ったことはないけどさ、あれじゃない？　悪魔にでも愛されてんじゃないの？
ハンナ　マジで迷惑だから。

ユキ、ハンナに何か小さな包みを渡す。

ハンナ　ん？　なにこれ？
ユキ　チョコ。――ひとりで喰ってるとデブるから。

◎【手紙】　リオの返信。

リオ　先日は、――ユキとハンナとふたりに手紙を書きましたが、今日はユキにだけ書きます。もしかしたら、この手紙が届くころにはハンナはいなくなってしまったあと、――なのかもしれません。だとしたら、いや、そうでなかったとしても、全然、今からあたしが書くような内容は、ユキに伝えるべきことじゃないのかもしれません。

一拍。

リオ　とてもデリケートな話だし、とても不愉快な話だと思うので、そして、――ハンナにまつわる話なので、もう、特に読む必要がないな、と思ったらここで読むのをやめて、この手紙は捨ててしまってください。

一拍。

リオ　私は、とてもとても嫌なうわさを聞きました。もう、あなたの耳に入っているのかもしれません。そうだったら書く意味はないし、もし、そうでなかったとしても、とても重大なことだから私みたいな第三者が言うべきことじゃないのかもしれません。少なくとも、確信が無いなら黙っておくべきことなのかもしれない、そうも思います。でも――、

一拍。

リオ　人はどんな時でも真実に向き合って生活していくべきだと思うんです。それも私の思い込みで、自分の価値観を押し付けてしまっているだけなのかもしれません。それでも、――私自身は、やさしいウソに包まれたまま暮らしていきたくはない。消えていきたくはない。たとえ自分の人生が全否定されてしまうような辛い内容であったとしても、真実の前には、正直でいたいと思っているんです。だから、あなたにも書きます。それしか、あたしには良く生きる方法がわからないから。

一拍。

リオ　端的に書きます。もしかすると、ハンナが今年、いちばん悪い人に選ばれてしまうのは、悪人選挙にまつわる不正をして、誰かを陥れようとしたため、なのかもしれません。そしてその誰か、というのは、ユキなのかもしれません。

間。

リオ　ハンナがどういう気持ちでそんなことをしたのか？　いや、本当はそんなことをしていないのか、――わかりません。それは私みたいな人間に言える内容でもないでしょうから、もし、――まだ可能なのであれば、ゆっくりふたりで話す時間を作って、ちゃんと話し合って欲しいんです。

一拍。

リオ　そして、それが難しい状況にすでになってしまっているのなら、――ユキちゃん、あなたには強く、しゃんとして生活していってほしいと思います。たとえ誰に、なんと思われていようとも。

◎【情景】　町の風景

ハンナ　そうじゃなかったら悲しいことを、
私はいつも、そうであってほしい形に変えてきた。
私が好きだった友達は、私のことも好きだった。
ということに、させてもらいたい。
でも本当は。
嫌いだったのかもしれない。
でも本当は。
興味がなかったのかもしれない。
覚えて、いないのかもしれない。
まさか。
でも、ひょっとして。
もし、そうだったなら、哀しい。
やるせなくって、やりきれない。
だから、そうではないことにしたい。させていただきたい。
だから私は、
ありもしない想い出を、さも、あったことみたいにしてみたり、
受け取っていない手紙をもらったことにしてみたり、
頼れる大好きなお姉ちゃん、が、いた、と思い込もうとしてみたり、
した。

だから私は、
ウソを優しさと言い換えてみたり、
不正を、大局的な見方だといいはってみたり、
憎んだことを、愛したことにしたみたり、
奪ったことを、与えたことにしてみたり、
傷つけあったことを、良い思い出だったと、溜息ついてみたり、
した。

自分の都合のよいように、心地よいように、いろいろと工夫して、書き直して。
そうして、作り直したことそのものを、なかったことにして。
はじめからそうだったようなフリをして、
それだけが本当だと言うようなフリをして、

▼音響　曲in　投票のテーマ。

町民たちが賑やかな雰囲気の中で投票している情景。

◎悪趣味な祭り。間違いの喜劇。

スー　ユキさん。
ユキ　あー、スーじゃん！
スー　お久しぶりっす。
ユキ　やあ、ホント、うーわ、久し振り、店潰されちゃって以来じゃない？
スー　はい。今年初めてなんじゃないですかね、会うの？
ユキ　ねえ。もう年も終わりだって言うのに、え、元気にしてんの？
スー　まあ、はい、普通に。というか、――流石っすよね。妹さん。
ユキ　ああ。ん？　ハンナ？
スー　あたしは感謝してますよ。や、勝手な話なんですけど、でも、――ユキさん、残ってくれて良かったんであたしは。

一拍。

ユキ　って、えーと、「流石」って何が？
スー　何がって、や、なかなかできるもんじゃないっすよ。あんなこと。
ユキ　ああ、そう、なの？　ん？　何が？
スー　自己犠牲っていうんですか？　家族だからってそんな、出来ないっすよ。
ユキ　――ごめん、全然わかんない。え、なに、何の話？
スー　え？　だから、――ああ、いや、自分まだ管理委員やってるんで、選挙前に不正の情報とか入ってくるんでちょっと知ってるんですよ、
ユキ　ああ、そうなんだ。なんか言ってたかもね＝
スー　＝はい＝
ユキ　＝って、え？　不正の情報？　が、入ってくるとなんなの？
スー　や、――なんかだって、あれですよね？　事前予測でユキさんが一位になりそうだってわかっちゃったから、妹さん、自分でわざと不正をして――
ユキ　わざと不正を？
スー　はい。だから、あー、予備投票では妹さん勝ったけどまだギリギリだったから？　それで不正行為して確実に自分が当選するように仕組んで。

間。

スー　なんか委員会も変な空気でしたもん。わざと不正する人間なんて居なかったんでしょうね、今まで。って、あ、委員会のことは（口外してはならない、の仕草をして）コレなんですけど、

ユキ　え・え、それじゃあなに、ハンナがわざと、――バレるように不正をして？
スー　はい。だから流石ユキさんの妹だなって。すごいですよ、ホント。
ユキ　そ、んなことってあるのかな？
スー　いや、あたしも考えたんですけど、あれ？　え？　そうじゃないんですかね？　結果見たら、そういう風に仕組んだとしか思えなくって。なんか、選挙のシステムを逆手に取ったっていうか／いや、もちろんあれですよ、妹さんのことはすごい、残念だとは思うんですけど、ショックだとは思うんですけど、
ユキ　ごめん、ちょ、ちょ、ちょっといいかな、あたし、もう、
スー　あ、ああ、そう、ですよね。なんか、すみません。貴重な、最期のお時間を。
ユキ　ごめんね、なんか久し振りなのに、
スー　いやいや、全然、もう、

ユキ、退場。

スー　元気出してくださいよ！　ユキさん残ってくれて喜んでる人間もちゃんといるんですからね！

普段通りの生活を送る町民たち。
その間を縫うように走り回って、ユキはハンナを探す。
が、見つからない。

◎よく見えないの

苅谷　実はあたしさ、
リオ　うん、なに？
苅谷　もう、本があんまり読めないの。

一拍。

リオ　どういうこと？
苅谷　目が悪くて。
リオ　ああ。

一拍。

リオ　でも、いつも読んでたじゃない？　いっつも。いっつも。
苅谷　読んでるフリだよ。
リオ　なんで？

苅谷　だってなんか、本読んでたら頭良さそうに見えるでしょ？
リオ　頭良さそうに見せようとしている時点で大分頭悪いけどね。

苅谷、ふと考えて。

苅谷　そっか。
リオ　うん。
苅谷　でもまあ、そんな感じ。

リオ、苅谷、退場。
ユキがハンナを探している情景。
ユキは町の中を懸命にハンナを探す。が、見つからない。

◎【手紙】　ユキの手紙

ユキ　リオさん、お手紙、拝読いたしました。いろいろと、教えてくださってありがとう。知らないほうが幸せなことも、世の中には沢山あると思います。でも、あたしも、ハンナも、そういうきれいな言葉で丸め込まれて、本当のことから目を逸らしていくことには、飽きちゃったんです。小さい、小さいころに。

一拍。

ユキ　悪人選挙の予測が出て、あたしが当選するかもしれないぞってなって、周りの人たちにはあたし、強がって、「覚悟はできてる！」なんて威勢よく言っていたんですけど、正直、めっちゃビビってました。だから今、心の底からほっとしている自分がいます。本当に、心から。自分じゃなくてよかった！　って思っているあたしです。

一拍。

ユキ　だけど、言ってやりたかった、って思いもあったんですよね。もうその、さ、最後、消される前にみんなの前で演説する内容とか一人でずっと考えてたんです。「お前らみんな偽善者だ！　みんなでいい子のフリして、善人ぶってなんだ、いい人競争か？　バカじゃねえの！　あんたらみたいなキレイな顔した偽善者よりなあ、やりたいことやって、言いたいこと言ってるあたしの方が、――あたしらの方が、ずっと、ずっとちゃんと生きてるよ。お前らじゃねえか。いちばん悪いやつはお前らじゃねえか！」って、――そんな風に言ってやろうと思ってたんですけど、ね。はは。まいった。ハンナまで偽善者の仲間だったとはね！　バカじゃねえの、ホント。

間。

ユキ　あいつが今、ここにいたら言ってやりたいことが山ほどあります。たくさんたくさん、言ってやりたいんですが、あいつはもう、居ないので、すごく、すごく、つまらない。

一拍。

ユキ　どうしてあんな嘘をついたんだろう？　なんのために？　どうして？

間。

ユキ　わかりません。だから、想像しています。

間。

ユキ　全部本当のことなんか言ったって、誰も受け止めてくれないから。本当のあんたなんて、あたしたちなんて、誰も好きになってくれないから、あたしたちはいつもウソばっかりついて、ウソで固めて、みんなを傷つけて、怒られたら逃げて、自分自身すらも騙して、そうやって、騙してでも、たとえ、全部ウソだったとしても、それでも、みんなと仲良くなりたくて、好きになってもらいたくて、嫌われてしまうのが怖くて、怖くて、必死で、マヌケで、クズで。それが本当のハンナじゃんね。

間。

ユキ　ああー、つまんねえの！　つまんねえの！

場面転換。

【6】すべてのお別れのために

◎【情景】　すべてのお別れのために

ヤヨイ　さて。これで、この町の話はおしまいです。もう、お話しすることはありません。ですから、ここで携帯電話の電源を入れて、おしゃべりをはじめて、お帰りになっていただいても、構いません。あと、五分もしたら、客席の明かりがついて、みなさんは、それぞれの場所に向かってお帰りいただくことになるかと思います。あと、五分もしたら、

ミーア　ばあちゃん。

ヤヨイ、ミーアと観客を見比べてしばし逡巡したのち、

ヤヨイ　あと、五分だけ＝

ヤヨイ　＝ばあちゃんはやめろっつうのに。
ミーア　ああ、ごめん。ヤヨイさん。ヤヨイさん。
ヤヨイ　なに？　どうかした？
ミーア　別にどうも。行っちゃったなあってだけ。
ヤヨイ　――うん。

間。

ミーア　どうせなら、もらっとけば良かったかね。表彰状。

間。

ミーア　どうしてこんなことしなくちゃいけないんだろう？　って、ずっと不思議だったんだあ。

間。

ミーア　どうしてこんな目にあわくちゃいけないんだろう？　って。
ヤヨイ　――。
ミーア　どうしてこんな毎日を過ごさなくちゃいけないんだろう？　いつまで続くんだろう？　どこまで我慢すればいいんだろう？　って。――誰かに答えてほしかった。

間。

ヤヨイ　ミーアさんは、あいつらを育てないこともできた。

間。

ヤヨイ　逃げるというでもなく、単に知らんぷりしてりゃ良かっただけだもん。

間。

ヤヨイ　でも、育てた。唯一、あいつらに答えてやったんだよ。

ミーア　ヤヨイさんだって。

ヤヨイ　いいや。

間。

ヤヨイ　あいつらが必死になって、「どこー？　どこー？」って聞いて回ってた時に、「ここだよー」って、そう答えてやったのはあんただけだ。

間。

ヤヨイ　誰にもあんたのこと悪くなんて言わせないよ。

間。

ヤヨイ　もう休みな。もうこれ以上は休めないってぐらいゆっくり休んで、それからのことは、それからまた考えりゃいいよ。

ミーア　ヤヨイさんは？

ヤヨイ　――こってりした料理でも作っとこうかな。

ミーア　この状況で？

ヤヨイ　ユキがもうすぐ、帰ってくるから。

ヤヨイ、ミーア、少し笑う。

音楽。ダンス。

幕